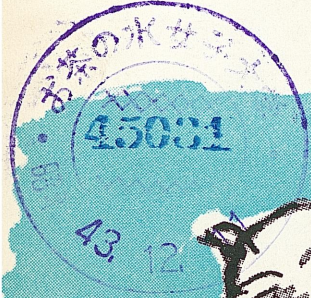


家庭・保育所・幼稚園

N24  
1  
66(2)  
1

# 幼児の教育

第六十六卷 第七号



7

日本幼稚園協会

■創業60年記念■

フレーベル館

# 現代幼児教育研究会

ことしの全国大会は蔵王です！

期日 8月8日(火)・9日(水)・10日(木)

会場 山形市 山形県民会館

宿泊地 蔵王温泉

全体講座 三木安正先生

分科会 ①三木安正 ②平井信義・秋田美子

③藤田復生 ④小林純一 ⑤磯部 俊

⑥藤田妙子 ⑦山村きよ ⑧山内昭道

の各先生による8分科会

ゲスト ボニージャックス・フレーベル少年

合唱団のほか記念講演特別講師

交歓 キャンプファイアー・ミーティング

・レクリエーションなど

会費 700円 (資料代ほか)

宿泊費 ㊤3,900円 ㊢3,500円 (2泊4食)

昼食費 390円 (3食)

観光費 650円 (山形→蔵王山頂→仙台)

(合計) ㊤5,640円 ㊢5,240円

定員 1,600名

締切 7月15日(土)

申込書 もよりのフレーベル館代理店・出張  
所で所定の申込書をお受けとります。  
満員になり次第締め切ります  
ので、お早めにお申し込みください。

主催 株式会社 フレーベル館

箱車の決定版！

# キンダー ワゴン

定価 5,500円



- 画期的な箱車キンダーワゴンをご紹介します。深さ・広さ・高さ・長さなど基本的な問題はもちろん、紐の長さまで充分研究しました。引きやすい、手をはさまない、重ねられるなど、機能的にもすぐれています。そのうえ、がんじょうさ、スマートさ、素朴さも決して忘れていません。
- かわい遊びの発明家たちは、このキンダーワ

ゴンを、なにに仕立てくれるのでしょうか？

船・汽車・自動車・飛行機…それとも夢の馬車？

■夢を育てるキンダーワゴン。活発な遊びが展開されるように、ボディは上質の木製、連結もできます。紐はじょうぶなナイロンロープです。

■規格—たて40cm・よこ86cm・深さ13cm・ナイロンテープ4m・本体ニス仕上げ

株式会社 フレーベル館



幼児の教育 目次

第六十六卷 七月号

表紙 井口文秀

☆幼児の芸術活動と人間形成.....	牛島義友 (2)
幼児の造形教育.....	林 健造 (6)
音楽教育と人間形成.....	瀬戸 尊 (12)
幼児の芸術活動とはどういうものか.....	細矢静子 (16)
幼児の創造性を伸ばすための音楽リズムの指導.....	田代廣子 (22)
幼児における創造性の機能と育成.....	篠崎謙次 (28)
昭和の幼稚園の歩みへ2	
私の経験.....	八坂富子 (36)
生活の中に園芸を(三).....	浅山英一 (45)
「基本的生活態度形成をめざす指導」の研究(四).....	稲岡百合・谷川敬馨 (54)
幼児前期の保育活動(三).....	岡本明子・金井淑 (61)
欧米の幼児教育⑧.....	西本 脩 (68)
カナダの幼児教育.....	西本 脩 (68)

# 幼児の芸術活動と人間形成

牛 島 義 友



現代生活において生活が機械化され、人間疎外が問題となってきたが、この人間性を回復するためには情緒的のものが、必要です。理性的のものはますます生活を機械化し能率化するだけであるので、人間関係を構成する相互理解、信頼、愛情が必要であり、またこのような情緒的のものが基調となっている芸術の世界が心をなぐさめ、いやしてくれる。芸術は失なわれた人間性を再生 (recreate) してくれるし、また今日、音楽療法や、描画療法などのように傷ついた心の治療方法としてさえ取り上げられるようになった。

この人間回復のためにはもっと別の方法もあるかもしれない。たとえばアルコールや薬物によって心の傷をいやしたり、競輪やかけごこで現実不満を一気に取り戻そうとしたり、性的感覚陶酔の中に現実を忘れることもできよう。しかし昔からの酒・女・ば

くちはいわゆる三悪であつてもっと昇華された弊害のないリクリエーションの方法としては、スポーツと芸術が求められる。音楽や絵を見ることによってその心が再生できることが教養のある人間としての姿であり、このような生き方を樂しめるために幼児期の情操教育を重視しているといえよう。

幼児の生活は自発性と獨創性に満ちており、それは彼らを芸術的活動へと導く重要な要素である。これは彼らの遊びの生活に自然に表現されている。したがって幼児たちが十分に完全に遊ぶことがまず第一に重要である。この子どもの遊びがしかし今日では余り喜ばれていない。ピューリタンの家庭では勤勞を第一としたために幼児の遊びが罪惡視されたことがあるが、今日は科学主義が支配的であるために幼児の遊びが無視されがちである。子どもの遊びの生活は想像的で、その意味では現実模倣的であつたり架

空の世界になりやすい。これを早く知識生活に導入するのが教育であると思つてゐるらしい。

幼稚園においても自由遊びを奨励したり、保育項目として遊戯を表面に出すことをさけるようになった。フランスの保育では自由遊びはなく、すべては計画保育であり、一斉指導的であるのに驚いたことがあるが、今日の日本の教育も学習指導的要素がふえ、計画的指導が強くなつてきた。なせもつと子どもたちを自由に遊ばせようとなないのであろうか。青年期の教育の場合にただ職業教育や資格獲得のための教育でなく、一般教育とか、哲学的な教科を重視したり、学校外の青年期の生活を豊かに持つこと、悔いなく青春を体験することが人生にとって有意義であるといわれるが、それ以上に幼児たちが学習とか計画指導から離れて想像生活を楽しみ、遊びの生活に没入することが必要であらう。それは自発的探求心を生み、生活を断片的に見るのではなく総合的に体験させ、生きることの楽しさを最もはつきり教えてくれるものである。

このような幼児時代を豊かに経験した人は心のふるさととしていつも幼児時代が浮かんでくることであらう。精神分析は生の本能と共に死の本能を説いているが、前者は積極的の現実問題を解決し創造していく力である。しかしこの力は他面それに休息を与え、挫折を救うもう一つの原理によつておぎなわねばならない。

これは休息や涅槃を求める心であり、過去の世界に退行する気持ちである。

退行現象というとすぐ不適応行動といわれるけれども、これは挫折した心をいやすのに最も適応した行動なのである。乳児が母の胸に抱かれるように絶対の信頼感に包まれた時にその心は落ちつきを取り戻す。乳児時代は追憶の及ばない時期であるので、いわば無意識的にこの母を求めるわけであるが、記憶の世界としては幼児期の生活の姿、それも幼児と同じような、純粹さをもつた自然の中で花をつみ、魚を捕えて暮らしたような生活体験に復帰することによつてその心のふるさとを感じ、そこから新たな創造力や詩想が湧いてくる。

農村で育つた人には必ずこのような強い心のふるさとがある。ところが都会育ちの人には意外に幼児期の想い出としてのイメージが乏しく、幼児時代に何も想い出すことがないという人も少なくない。これは不幸なことであり、この貧しい心からは芸術的なものが生まれることも少なからう。

次に幼児期においてその感受性を養ふことが必要である。色彩や音に対する感受性は精神年齢一、二歳の段階でも十分に養われる。重度の精薄で精神年齢一、二歳の子どもでも意外に早く歌を覚えるし、しかも音程は正確である。歌詞の方は出たらめであつても音の方は正確である。もつとも普通の幼児はこれほど正

確には歌えず強弱のみで音の高低をごまかしている場合もあるが、それは彼らの発声機構が未発達のためであつて耳の方まで音痴であるわけではない。故に乳児時代によい音楽を聞かせることの重要性が考えられる。しかもここで必要なのは反復して与えることである。今日の子どもに反復して与えられる刺激はコマージヤルソングであるが、このことが子どもに与える影響は少なくない。音楽は子どもにも意外によく理解され、それだけによい音楽と悪い音楽も区別されるべきでなからうか。古く孔子はこのことを指摘し淫靡な音曲の与える弊害を強調している。

色彩や形に対する感受性や弁別力も年少幼児において十分発達する。故にこの時代から調和的の美しい色彩を経験させることが彼らの美術教育に大切である。日本の生活環境は色彩に乏しくまた鈍感である。毎室のベンキを塗りかえる生活では自ずから色彩に対して敏感になるであらう。幼児の室や保育室などの色彩については特に心を配る必要がある。この場合ベンキ屋まかせにするとかベケバしくなったり、不調和になつたりすることが多い。さらに絵本の色彩、あるいはその描き方が芸術的なものであることが必要である。この幼少期に植えつけられた感覚感受性は一生残り、いわゆる教養の水準を示すこととならう。

このように生活の感覺的素材がまず十分に洗練されたものであることがのぞましい。

次に幼児がもっとも自由に創造活動をなすのは絵画を中心とした造形の世界である。そのなぐり描きやフィンガーペインティングの中にも子どもの情緒が直接表現されるし、さらに形がある程度描けるようになると、直接には子どもの知的能力の反映でもあるし、おさえられた欲求や願望を投射するものでもある。この心のうったえと能力を駆使して自由に画面に現わすことができる。

純粹の意味で芸術活動に近いものといえよこの描画の世界であらう。この絵はふしぎと恵まれた家庭環境に育つたものは案外に内容に乏しく余りうったえるものを持たぬようである。これに反し心に欲求不満をもち、しかも自然の環境に育つたものの方がすばらしい絵を描く。他の教科学習だと都合児の恵まれた家庭の者が優秀であるが、絵の場合はそうでないようである。

この描画活動が人の性格形成にどのように影響するかはよくわからない。たとえば芸術的な創造性が科学者としての創造性につながるかどうかはつまりわからない。また幼児時代によい絵を描いた子どもが一般に成長に応じて平凡な概念的な絵を描くようになるし、創造性は枯渇してくる。しかし絵を描いている時に直接その欲求不満を満たし、心理療法的役割を果たすことは確實である。したがつてもし絵を描くことを知らなかつたら萎縮しゆがめられたものが素直に成長するといつてよからう。

子どもに音楽や踊りを習わすことは、芸術活動というよりも子

どもに技術を教え、生活の型を習得させるのに非常に役立つ。普通このような技術や型は芸術活動としては軽視、あるいは拒否されている。たしかに子どもが音楽のけい古をする時には自由な創造活動ができるわけではなく、いやがるのをむりに練習させるということさえ多い。自由な音楽活動といえはむしろ即興的に勝手に歌う気まぐれな鼻唄ぐらいで、音楽のけい古となると必ず正しい音の出し方、楽譜の読み方が強いられる。踊りのけい古だと勝手な表現運動ではなく、基本的の型が仕こまれる。この訓練は本格的の芸術活動に入る基礎であり、遊び半分のことではない。しかしこの基礎の修練を受けておかなければ、少なくとも譜が読めなければ後になって音楽の演奏を楽しむことはできない。

青年期になると音楽などの興味が急に高まってくるが、この場合に幼児期の訓練をうけたものは演奏を楽しむことができるし、それのないものはレコード鑑賞家となるであろう。スポーツを自ら行なう者と試合を見るのとは根本的に相違するが、音楽を楽しむにしても自ら演奏することの方がその楽しみは数倍する。

その他日本のおけい古ことでは技術よりも更にその前にある作法が重視される。茶道などはそのマナーだけで成り立っているともいえよう。このマナーを通しての教育は今日極端に軽視されている。しかしこれは現実の生活に区切りをつけて早くその道には入れるようにする誘導法とも解釈できる。一動作ごとに心をくば

り、緊張してなされるものもやがて無心の形で作法通りのふるまいがなされ、しかもたえず新しい事態に対処できる十分の備えがなされている。この身心が一体となることは技術の修練と共に精神の修養となり、人間形成の重要な方法となる。芸道を極める人も武道に修練する人も等しく禅の道に通じてくる。このいわば日本の修業の道、人間形成も再認識すべきであろう。

またわがくにの幼児の芸術教育では創造活動が強調されすぎて伝統的な芸能を維持する面が少ない。郷土芸術はその郷土の生活の中で伝えられ、その技もますます練られている。

これを媒介として人々は歴史の中に生きる存在であることを強く感ずる。新しい芸術運動はこのような他とはっきり区別される類型的なものが、異種の美の類型と接触し総合されることによつて新しいものへと開花して行く。インドの学校では英語やその他の教科では世界共通のものをとり入れるが、音楽の時間は断固として伝統的なものを守ろうとしているのに強く打たれたが、わが国はこのような心がまえは余りにも少ないのではなからうか。今日の日本人は音楽にしても、文学にしても絵画にしても西欧的な文化をいきなり吸収しているが、これでは結局その亜流に止まり、西欧以上の芸術文化を生み出すことは困難ではなからうか。伝統にとらわれることもよくないが、伝統をもたないことも淋しいことではなからうか。

# 幼児の造形教育

## 基本となる問題について



林 健 造

○むなしさを感じるとき

だれでも、人はふと自分のしている仕事に何とむなしさがあるむなしさを感じることもあるものだ。

例えば、子どもに絵を描かせる仕事の中で。

あの子はだまっていたって、どんどん好きなように描いている。あの子はまた今日もお人形さんね。あの子はぐるぐるクレヨンでわけのわからない線ばかり。そしてあの子はきつと今日も「ボク描けないよ。先生描いてよ」というに違いない。

教師は、あっちこっちとび回って、どの子にも絵が描けるようにと一生懸命話し相手になったり、ヒントを与えたりして疲れきってしまう。そんなとき、がっくりと肩をおとしてやっばりあの子はだめね、と思ったり、絵を描いて何になるのだろうと、ふとむなししい風が胸中をふきぬける。

また例えば粘土あそびの仕事の中で……。準備から、後始末まで

汗びっしょりになりながら、粘土を指導する。

「だって子どもたちが大喜びなんだもの」というムードだけを支えである。誰か天井にまたぶっつけないかしら。誰かは、お水を入れすぎてビチャビチャにしてしまうかもしれない。うっかりしたら、また流し場がつまってしまうかもしれない。あの子は、体全体を使ってすごいわんをつくるというのに、あの子はまたおだんごばかりか。

指導が終えたとたんにまたがっくり、なんで粘土なんてしなきゃあならないんだろう。またぞろ、むなしさが襲ってくる。というのではないだろうか。

○造形する意味

だから幼児に造形教育をする意味を、何とかはつきり把えておきたいと思うのである。そうすれば、ともかくも自分がしている仕事にもっとはつきりした自覚が持てるはずなのである。



二千万年も昔、猿から進化した人間のことを考えてみよう。これも一つのアプローチである。

人間の先祖が木からおりて、二本足で立ったために手でいろいろのものをつくるようになった。自分の食べ物をみつけてきたり、外敵から自分を守るために道具をつくった。そうすることによって脳が非常に発達してきて、ますます手でいろいろなものがつくれるようになった。

もちろん、はじめに言葉ありきと聖書にもあるように、人間はことばを生みだすことにより、意志の伝達ができるようになり、集団社会をつくりあげた。集団社会の中で互いに協力しあいながら、人間はますます進歩していった。

つまり人は、手でものを表現することで、まったく他の動物と違って、自然を支配する力をもったわけである。

### ○想像力という武器

しかし、ものをつくる動物は人間だけではない。よくいわれる言葉だが、くもは立派な織物師であり、はちはすばらしい建築家である。しかし、はちもくもも本能にまかせて、くり返し同じものをつくっているにすぎないし、そこには個性も、新しい工夫もみることではない。

ところが人間は、どこが違うかという点、つくる前にそれを考えることができる。つまり想像する力をもっているということである。

独創力・構想力・発想力などと呼ばれる一連の能力をもっているところが、全く他の動物と違う点であろう。

もし有史以前の赤ん坊を現代につれてきて育てたとしたら、その子は、われわれと少しも変わらない現代人としての知性をそなえた人間に成長するだろう。ところが、一匹の猿を移してきてもやっぱりそれは猿でしかないだろうし、せいぜい一輪車に乗ってタバコをふかす以上はのぞめないだろう。

神さまは、人間に、鋭い牙も、強靱な爪も何も与えてくれなかったかわりに、すばらしい脳を与えてくれたようである。時実利彦氏の話によれば、生まれたときの赤ん坊の脳の重さは370~400g、体重の10%、頭でっかで容易に他の動物のようにには立てないのである。生後の脳の発達は、身体他の部分よりめっぽうに早く、六ヵ月で生まれたときの重さの二倍になり、七、八歳では大人の重さの90%に達するというから、いかに小学校一、二年生までの教育が大事な場であるかということも想像できる。

ともあれ、人間はこの想像力によって巨大な恐竜にも氷河や地殻の大変動にも絶滅することなく生きのこり、永い年月をついやして、今日のすばらしい文化や文明をつくりだしてきた。

ところで子どもが粘土で動物をつくったりどんぶりをつくったりしていることは、実はこのことと深いかわりがあるのである。大昔に、人間が考えたと同じことを、子どもたちは粘土にいでみながら人間が歩んできた歴史をくりかえしながら、生活の知恵

を獲得しているのである。「人は一生の間に、人間の歴史を経験する」という言葉もあるが、われわれの祖先が何万年もずっと考えてきたようなことを、子どもたちは粘土なら粘土という遊びの中で、考えているのである。

われわれの祖先が生み育ててきた文化の基本的構造を自己に同化し、それを変容しつつ人間に成長させること」そのことに、子どもの絵や製作が、しっかりと結びついているのだと考えてくると、子どもが絵を描いている活動にしろ、粘土でお皿をつくっている子どもの活動にしろ、それはきわめて大きな意味と価値があることがわかる。

ただそのために、何より大切なことは、子どもがいつも受身であっては、創造的なものはのぞめない。したがって、いつも一つの型の中にとじこもっていたり、つねに受身である場合には、変容の目的は果たせない。

「私なら」とか「ボクはこうだな」という前向きな態度が育っていないと次の段階の創造的な発展は当然のぞめない。

#### ○おどろきをもつ子

生き生きしている子どもとは、おどろきをもつ子である。りんごの中に種子があったとっては驚き、青虫をみつけては、すごいなあと呼ぶ。ものごとくに感動する子どもは、好奇心でいっぱい、生き生きと生活しているから、新しいことを見つけだして驚くことができる。それも人に教えられたのではなく、自分自身目

で発見することが多い、いわゆる主体性のある驚きである。このような子どもはつねに前進しようとしているので新たなものをつくりだす力（創造力）が豊かでもある。

反対に、何にも興味を示さない、驚ろかない子を考えてみたら、われわれは、非常に不安な感じになるのは当然であろう。

「おいしい？、この洋服すてきでしょう。このおもちゃすこいよ！」

親が一生懸命かかって、かえってくる返事は、いつも気のない「ううん」だったらその親は心配で心配で仕方がないに違いない。もちろんここからは、新しいものをうみだす力も、何かを求めようという積極的な力ものぞむことはできない。

われわれは、子どもに絵を描かせるときなど、元氣よく、のびのび思ったように描きなさいね。などと励ましているのは、子どもたちが好奇心に満ち、みずみずしい感性をもって、いきいきと主体的に生活できるようになってほしいと願うからなのである。

#### ○「あ表現」と「ん表現」

ところで指導に当たっては、指導のねらいが明確である必要があるというようなことはいうまでもないが、案外漠とした中で、どっちともとれそうな与え方をしている、評価だけは一つの結果だけをとりあげようとすることが多い。

例えば「今日は、粘土で好きなものをつくりましょう」というだし方をしているのに、できた結果は、象やわにをつくった子は

○、おだんごづくりは×というような勝手なこのみで評価しているなどはそうである。おだんごづくりだって、常に無気力の表われではない。中には大きい小さいの、いい形などと夢中になつてとりこんでいる子もいるのである。

造形表現には、大体二つの世界がある。その一つは、絵で代表されるような主観的な感動を率直に表現することで創造力を育てていく分野と、もう一つは製作で代表されるような、ある目的に適応するためにいくつかの条件の中で、思考をともないながら創造力をのばしていこうという分野とである。

このような二つの世界を、仮に神社の狛犬のように、あ、とん、という一対のものとし、あ、表現、ん、表現と名付けてみた。北原白秋の「歌は阿也」という言葉があるが、まさに絵も、あ、という感動の声である。先へのべた驚きをもつ子の、すごいなあというの、あ、である。

一方、表現の方は、うーん、どうしたらいいかな、こうしてああして、などと考えながら表現が深まっていく形になる。

ここでは、普通おもしろい材料がまずあって、これで何かつくれないかなという場合と、何かつくりたいものが先にある場合と、何かいい材料はないかなとか、どうつくるかなという場合とがある。幼児の生活をみると、このようなことは意外に多い。

板ぎれをみつつけてきて、「いいものつくっちゃお」としたり、「ころころと走らせたいんだよ」などとだだをこねたりしている

のはそれである。したがって、指導に当たっては、どっちをねらうのかをはっきりさせることがコツであるし、導入でもあ、表現、ん、表現では大分違ってくるはずである。

何でも好きなものをと与えれば、あ、もんも両方出てくることは当然で、むしろ個性的で生き生きとしていればいる程両者が表われてくることになる。

さっきのどんぶりやおだんごづくりの子もだつて、むしろん、表現で創造的な活動をしていると見るべきであろう。

一般に造形指導は、常にあ、表現的方法で何でも片づけてしまおうというくせがある。

「のびのびと、大きく、思いきってだ、あ、とね」などとよくいうが、それ自体悪い言葉ではないが、どうしたら立つようにつくれるのかななどというん、表現などで静かに考えさせるような場面でもいさかまわずだ、あ、とでは成果はのぞめないし、ん、表現の格好だけで、中味はあ、表現にしかならないことになる。

#### ○問題になっている問題

私はこの春、一つの展览会と一つの研究会にでかけて、大変心に感じたことがある。

展览会の方は、横浜のある幼稚園であるが、絵でも製作でも、明るく生き生きとしたすばらしい作品が多かったが、それらが、その園の生活と実にうまく結びついているのである。

例えば写真のように、みんな「なんきんまめ」をお庭にまい

て、それが芽をだし、花を咲かせ、やがて実になるという一貫された過程の中で、その折その時の感動が、絵となり、製作となり、詩<sup>うた</sup>となつているのである。

①は、なんきん豆の花が咲いたとき、思わず口ずさんだ子どもの言葉が、たくまざる詩をうみだしたものでしょう。

「なんなんなんちゃん なんきんまめちゃん あめがふったら  
おはながさいた はやくたべたい なんきんまめちゃん」

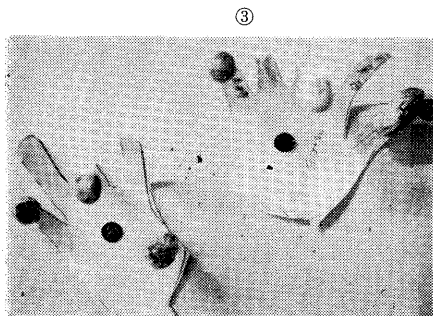
②は、「こうしてお豆うえたらね。はっぱでできたよ」と驚きと喜びいっぱいの子どもの語りかけが、きこえてくるような絵である。

近頃、幼児にも観察画をさせることが大分叫ばれてきている。

たしかに鶏でも兎でも、みて描いたのと、みないで描いたものとは、まるで感動が違う。かといって昔のバケツや弁当箱を描かせるような愚をくりかえすことは無意味であろう。

幼児の観察画とはまさにこのなんきんまめのような方向でなければならぬのである。

③ やがて収穫。この日をどんなにか子どもたちは待ちわびていたことか。生長の不思議さ、自分たちの手で



お豆が作れた喜びはまたどんなに大きい心の収穫でもあったろう。私たちにも覚えのある、豆のから指にきして遊ぶあれを、写真③のようにこのかわいい手型をつかってこんにちわをさせている。

こうありがたいものである。絵も歌も製作も自然も総合されて、一つの幼児の成長の世界にすなおにとけこんでいる姿が見事であった。

また、幼児の絵を、母親がまったく同じように刺しゅうした作品もあった。幼児の絵を母親に理解させるのに一番いい方法であったとその園の先生は話してくれた。

次は研究会である。

ここでは、経験の豊かなすぐ熱心な先生の発表をきくことができた。

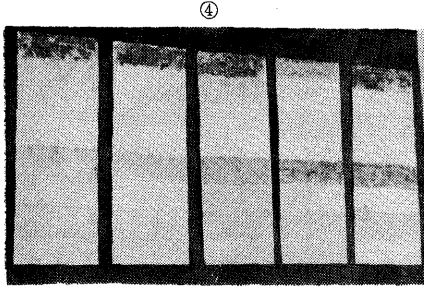
どちらかというと、子どもの

造形は、いつも好きなものをだけでは、ある数人の子だけのための造形指導に終わってしまうので、みんなのものにするために、みんなが描けるようになるためには、もととなる手だてをしつかり教えなければならぬという立場を強くとっていた。それはそれでたしかに今日の造形指導のあまさをしていた。

実際のを観察させている絵でも、お話の絵でも、幼児にふさわしい配慮を通した、あたたかい指導が感ぜられた。

しかし、基礎練習とでもいうのがあって、水絵の具をうすく塗ったり、濃くぬったり、線の練習をしたりしているのがあった。

(写真④) まずそのことをしっかりはじめに指導することが必要であるというのである。また木の葉の観察なども、まずタテヨコの比率の大まかな見当をつけさせてから葉脈までもたんねんに描かせた絵もあった。

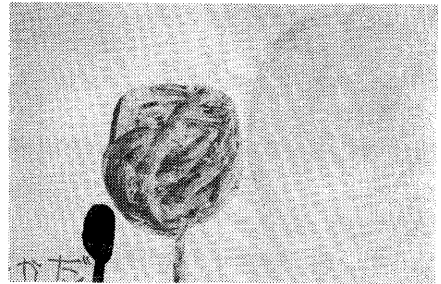


④

ここまでくるとさすがにはなと考えさせられるものがあつた。中学校の「色や形の基礎練習」とちよつと同一ことをしているのである。

しかし子どもたちはとても興味を持ってやっていたという。興味をもつたからといって何をやって

⑤



もいいというものではあるまい。

ただ同じような発表でも、写真⑤のように、ゴム風船をふくらまして、ずんずん色が淡くなるというところを取りあげたものがあつた。それが内容的には、色の濃い淡いの基礎練習になっているにもかかわらず、子どもたちには驚きや変化のおもしろさなどを素直に感じとらせながら、基礎的な手だてがごく自然な結びつきとなっている点、アイデアとしてすばらしいと思つた。

幼児に与える造形の手だてというものは、むきだししの冷たいものであるよりは、こんなあたたかな手だてでありたいものである。(十文字学園短大)

— 新 刊 —

「幼児の教育—原理と研究」

津守 真・木原溥子編

本誌・第53巻(昭和29年)より第64巻(40年)にいたる約十年間に掲載された論説を選択、編集した書物。フレール館 定価六五〇円

# 音楽教育と人間形成

瀬戸尊



音楽が人間形成に重要な役割を果たしていることは既にいろいろと考えつくされているのだが、音楽教育ということになると、これを概念的に論じることではできても実際問題として反省すると、なかなか簡単に割り切れないことが多い。

一口に音楽といえ、高級な芸術であって人間生活とは不可分の歴史をもっている。いま考えようとする音楽教育は、学校とか寺院とかで音楽を教えることに関係してくるので一般音楽そのものの価値とか影響とかいうこととは別に、教育そのものの目的を見出し、それにしたがって内容方法が計画されることになってくる。もちろん学校における音楽教育にも歴史があつて二十年前と現在とでは目ずから目的も幾分変遷してくるのは当然であろう。

昔は、特定の歌を歌えるようにすれば、人間形成の一翼を荷な

うことができるとしたこともあつたであろう。その時代には特定の歌を歌うことすら子どもには難しかったのであつた。そのためには専門の先生が雇われて独特の方法で教授したのであつた。いうところの口授法である。口移し法である。社会にレコードやラジオが行き渡って、聞き覚えする機会ができてくると、聴唱法ができるようになる。さらに、楽譜を用いて自分で新しい歌が歌えるようにしたいとして長い間、苦心を重ねたことである。音楽環境も整っていかなかったし、子どもの感覚や心の働きなどについて少しも考慮しない論理的な方法が押しつけられたから子どもも大へん苦労をしたことである。

やがて、子どもを理解していた先覚者がいろいろな方法上の改善をしたので戦後は徐々に楽になつてきたのであるが、改善された

方法だけが伝わっていつて肝じんの子ども理解を怠ってしまう場合もないではなかった。

まして人間形成の一翼となるために、音楽教育はどんな役割を果たしているのだろうか。音楽教育がただ技術や知識の伝達に腐心しているだけで充分であろうか。指導の方法が改善されて、おぼえることが楽になると今度は教材を高級なものにして、より複雑な音楽の演奏に取り組みはじめる。教師自ら感動して満足しようとするが子どもはどうであろうか。

小学校の低学年の子どもに「音楽はすきですか」ときくと、大體の子どもは「好き」という。中学年になると通信簿でよい評点をもらっている子どもは好きだという。中学校の生徒は、「音楽は好きだが、学校の音楽は嫌いだ」というものもある。

文部省は、「楽しく歌う」と注意書きを添える。ある識者は、幼少の時は、どんなに苦勞しても、訓練をやりぬけば後で楽しくなるから、教育としては、やりぬく根性が大切だという根性論を掲げて、楽しくない音楽教育を礼賛する。

いつまでたっても技術一点張りの教育からはぬけ出る余裕がない。相当の識者でさえ、音楽には厳正な規範があるから、絵画のようにはじめから自由という活動はない、どうしても正式に技術を伝達されねばならないとしている。正式な技術ということでは、

は、専門家といわれる人々には頭が上がらない。学校という格式の高いところでは一層その觀念が強く、支配的であるから、専門家と称せられない一般の教師が如何に劣等感を抱き、ピクピク音楽を指導していることだろう。何か間違いでもしているのではないだろうか、誤りを伝えていのではないかという自信喪失が、いよいよ音楽指導を硬くしているのではないだろうか。自信のないところに人間形成などという総合的な大目標を達成する余裕など少しも意識できず、その日をようやく過している場合さえ多いのではないだろうか。

一方、専門家と称する人々は、正しい技術を伝えようとして努力をしているのだ。正しい技術にこだわって、時には、習う側の苦勞のほども感じとる余裕もなく、徒らにさせて、音楽を苦にしたり、きらいにしている場合もなきにしもあらずであろう。これでは人間形成とは別の時間だと考えられる。

静かに話し合う研究会では、「音楽教育は専門家をつくるのではない、音楽経験を豊かにし、音楽感覚を醒めさせ、美に感動する情操の教育をするのだ」と合意する。この静かなる高き合意点を、どのようにして達成しようとしているのか。ある識者はいった。「音楽を教えるのではない、音楽で感動させるのが音楽教育のねらいだ」と。また、ある識者は「音楽を教えることはできな

い。自分で音楽を自分の内に創るように導くことなのだ」と。

音楽の教育説にもいろいろな立場があつて、音楽教育は「若干の専門家と大部分の鑑賞者をつくる」のが目的だと結果論を目的論にすりかえている識者もあるという現状である。

さて、音楽や指導者の側の論議を別にして、幼児の成長過程を瞥見してみよう。

母親のことばや歌声をきいて次第に音感覚が発達してくる。二歳前後ともなれば、家族の歌う声や、演奏する楽器の音や、テレビの光音に反応して、頭をふり、足をふみ、手を屈伸して、模倣唱する。その楽しそうなことといったら、その器用さといったらただ恍惚としてしまうくらいである。

その上「パパも」「ママも」「ばばも」「じじも」と指名して同調させる。近頃は歌ったことのないつましい祖母も、厳格な祖父も、遠慮勝ちな嫁も、同調せざるを得ない。同調すれば案外楽しいことがわかつて年寄りも顔を紅潮させて上機嫌になる。みんな仲よしである。一家が生々した平和な心になる、愛情がこみ上がってきて、みんなの心の中に流れる。こんなフンキキを十年も、二十年もいや三十年も家庭に、学校に社会に持てたらと誰でも思うだろう。

この子どもがやがて幼稚園にはいっていく。

手をつないで歌をうたう。リズムにのって走りまわる。音楽を聞きながら絵をかくし、お話もきく、粘土や紙で製作をする。

ここで音楽の指導という考えが働いてはいるが、いわゆる世にいう指導の形態をとらないであろう。先生もみんないっしょに同調するのである。厳正な叱正や叱声は聞かれない。すべて子どもが感得できる可能性にに応じて説明できない体得による吸収力で成長していくのである。楽しい毎日である。もし音楽の専門家にいわせたら、音程は不確かでありリズムは数学的に不正確であり、発声は地声であり、テンポはイレギュラーであり、それらを批評しない教諭の音楽性の低さに、あきれてしまうかも知れない。

音楽の教育は、そんなものではないであろう。教育である以上は目的があつて、カリキュラムがあつて基礎的な積み重ねがあるべきだであろう。

基礎指導のない音楽教育はないとさえいつている識者もあるくらいであるから、幼稚園の音楽をみてあきれるのも無理はない。しかし、幼稚園の音楽は、あそびではあるが音楽の基礎教育である。あそびであるから強制されない。自由な参加であるから苦しくない。むしろ楽しい友だちづくりの火花であり、心ゆくまで開放される動きでもある。しかも音感覚やリズム感覚の醒めが旺盛



な年頃だから、そして音楽を楽しむことだから、りっぱな基礎指導にほかならないのである。

機械的な音程練習や発声練習や、リズム訓練や聴音練習などが基礎指導だと考えるのは、技術一点張りの音楽教育者のこだわるところであって、根性論や天才論などが根底にあって、選ばれた子どもを自あての教育に偏するのではないだろうか。もし人間形成という教育の究極的な大目的を考慮して行なう音楽教育であるならば、いま述べた幼稚園音楽をもっと大切に育て発展させないと、いわゆる教科主義のバラバラな教育を導入することになってしまう恐れが多分にある。

例えば、近時、幼稚園にも器楽合奏の指導が導入されている。うれしいことであり、ごく自然であって、もっと早く導入されねばならないはずのものであった。

これが盛んになるにつれて、演奏の形態だけが持ちこまれていく心配はないだろうか。即ち、昭和の初期にわが国で芽を出した小学校の器楽合奏が、子どもの自然の要求で、楽隊あそびを子どもが創造しつつ自由に演奏したものが近時は、専門家がひどく高級な難しいものに作り上げる傾向があつて心配しているのだが、それと同様に、幼稚園でも小学生の演奏形態そのままを持ちこんで仕込んでいくむきもあるやに聞いている。そうではなくて、子

どもが、楽隊あそびを勝手に楽しむところに創造的な活動があるので、仕込んで形をととのえてしまつては少し淋しい感じがしないでもないのである。

もっと子どもの発想を大切にしてやりたいものである。「ぼくが大鼓を打つから、きみはタンブリンを鳴らしてね」という合奏でないとあまり大した意味がないのではないか。

もっと子どもの創造意欲を、子どもの遊びを大切にしてやりたいものである。

文部省で小学校の音楽に「さぐりびき」ということを示したのは、子どものあそびや、くふうを尊重したことなのだと解釈する人があまりにも少ないことを不思議に思うのである。

音楽教育は、技術を授けるだけが目的ではない、自分から美を追及する、美に感動する人間を形成したいのである。いや、もっと人と親しむ、人と協調する、心情を遠慮なく表現し得る。いや、もっと明るい心意の生々した創造性ゆたかな人間を形成したいのではあるまいか。

音楽は特定の人々の専有物ではない。本当の意味の全部の鑑賞者のために教育されねばならない文化である。

(文京区教育センター)

# 幼児の芸術活動とはどういうものか

## ——音楽を中心として——

細 矢 静 子



幼児の芸術活動とは、音楽や絵画製作などにおける、主として創造的な活動をさしている。

一般に幼児の音楽活動は教えられたことを再現するということが多い。

幼児期は聴覚がもつとも発達するといわれているので、この時期にしっかりと音楽的感覚を身につけさせようとの意図から、これも当然なことであるが、しかしまた、この時期こそ、音楽を通して創造的な活動ができ、豊かな創造力をもった人間となるように、自発的な創造活動も重視されなければならない。

私はこのような考えで、毎日の保育にあたっては、幼児の実際の生活の中でどのような創造的な音楽活動がみられるかを述べてみよう。

### 遊びの中で

入園間もない三歳児は実にのびのびとしていて、したい放題のことをしている。この自由奔放な心を損わないように教育したい

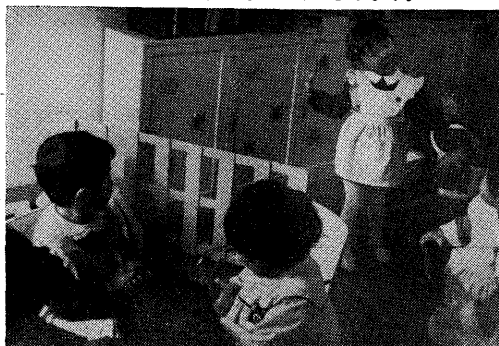
ものと思ひ、幼児の自発的な考えを尊重し、それをできるだけ保育にとりいれた。

例えば、部屋の中では五、六人のグループで『誕生日ごっこ』がはじまっている。粘土でバスデーケーキをつくり、「今日はMちゃんのお誕生日よ。お祝いに歌をうたいましょう」といって、「ハッピーバースデーチュー……!」とうたう子、「ちょうちよう」をうたう子、「CMソング」や「黒田節」（もちろんことばも節もうろおぼえ）までとびだし、歌のうろおぼえのところが一緒にうたってやると子どもたちは大喜びで、そのうち、「わたしは白鳥の湖をおどります」といってバレリーナの身振りでおどります子どももいる。この時、幼児の動きに合ったレコードを流すと、子どもたちは三人、四人とよってきていっしょにおどります。教師も加わりパートナーの役をつとめると子どもたちのよさこびはますます高まり、庭で遊んでいた子どもも集まってきて、たのしいリズム活動が展開された。

誕生日ごっこ きょうは、まみちゃんの誕生日



パースデーケーキをつくりましょう。



おいわいにわたしは、白鳥の湖、をおどります。

教師はピアノをひいて教えるばかりでなく、子どもたちの遊びをよくみて、幼児の表現活動を助長していくようにすれば、三歳児でもこんなにたのしくいろいろな活動ができるのである。この「誕生日ごっこ」は幼児が気に入って、三、四日続き、その後も度々くりかえされ、その度に、「レコードをかけてちょうだい」といつてきた。

歌をつくる

幼児は心が満たされている時は、しらずしらずのうちに歌ともことばともつかないものを口ずさんでいる。これは、二、三歳頃

に多く、この時期から創造性を育てるように導びいていけば幼児はよろこんで自分でうたをつくりだす。創造的な活動は、何より雰囲気が大切である。どんなことをしても平気という、安定感を与え、大人が批判したりしなければ、子どもはいい気持ちになつて大胆に歌をつくりだす。

歌をつくるといっても、幼児の場合は即興的につくるのであるからこうした活動を教師はみのがさずとらえて、のばしていくことが大切である。

当園では、三歳児でも即興的に歌をつくるということが盛んで、

しかもその歌の内容は創造性にあふれている。(「幼児の教育」六十四巻十一号、六十五巻十二号参照)

ここにその一部を紹介しよう。(次頁楽譜①②③参照)

四歳児では更にすすんで幼稚園の生活がそのまま歌となるなど、ますます表現活動が盛んになった。

④友だちが家からもつてきたバラの花をみて、すぐさま歌をつくりだす子ども、また、⑤雪の日の経験、⑥豆まきなど、その日、その日の生活がつきからつきへと歌になって、いくつもいくつもつくられた。

⑦雪は天の神さまの一年ぶりのウンチだよ。スマートなウンチだよ。

節はあまりついていないがこのような独創的なものもあった。

幼児は自分たちでつくった歌は、すぐにおぼえてう

たいだし、よろこんで幾度でもくりかえしてうたう。そのよろこびよりは大人の想像以上のものである。

また、即製の曲を教えると、その歌の一番、二番にひきつづき、三番、四番……と自分たちでつくりだすというようなことも多

①

おばけはほんとに こわいのよ どうしてもどうしても こわいのよ

おばけはぶるぶるんで こわいのよ みんながこんげんを たべちゃうぞ -

②

へびー へびー へびのしっぽ へびーへびー へびのしっぽです

③

あたまのなかには きかいはがはいついる なんでもなんでも かんがえる

④

つくえのうえに ぼらがさいている それはだれが

もってきたばらでしょ だれがもってきたの きれなきれいな ばーら

⑤

つらら つらら つららはやねに さがっているのね

ふとい つらら ほそいつらら ゆきはまっしろで

きれいだね ゆきも ゆきも まっしろね

⑥

まめまきまめまき おもしろい まめを パラパラ おには

どこからくる の か ふくはうち おにはそと おーには

にげていく ばんざい ばんざい はやく にげてゆけ

くみられた。例えば、遠足で、いもほりにいくので、

1 「でぶいもちゃん、つちのなかでなにしてたの。」

2 「ちびいもちゃん、つちのなかでなにしてたの。」

「みみずと、けんかなんかしてたのかい。」

という歌を教えると遠足のあとで実際にみたおいもの形が、三番、四番、……となつてつくられた。

3 「中ちゆういもちゃん、つちのなかでなにしてたの。

ありんこと、おはなしなんかしてたのかい。

4 細いもちゃん、つちのなかでなにしてたの。

こどりの口笛きいてねてるのかい。

5 くっつきいもちゃん、いつもくっついてなにしてたの。

まいにち、ないしょばなししてたのかい。

6 「ぐにゃいもちゃん、いつもぐにゃぐにゃなにしてたの。

せなかをおされて泣いていたのかい。

歌をつくるということを作詩、作曲とむずかしく考えないで、

とにかく幼児につくらせる機会を考へることが望ましい。

音楽活動を総合的に発展させて、『劇あそび』をすることは子どもにとってなによりたのしいことであるが、ましてこれが、自分たちでつくった劇（話の筋、セリフ、歌、ゆうぎ、道具）となると子どもたちにとっては、これは最高のよろこびであり、「もつとしよう」といって食事も忘れるほどであった。（劇の内容は前述『幼児の教育』に発表したものでここでは省略する）

こうした活動は幼児にとって、生涯忘れることのできない尊い経験で、幼児の創造性をのばすと同時に、豊かな人間形成の苗床をつくるものである。

## 楽器

楽器は、器楽合奏としての発表会のための練習ばかりでなく、

普段の生活の中で、楽器にふれる機会を多くし、また、「汚れた手で使わない、乱暴に扱わない、使ったあとには片付ける」と約束して、ピアノ、オルガンを含めて、子どもたちに自由に使用させるようにしていくと、子どもたちは毎日の遊びの中でたのしく楽器にふれ、自分たちで、いろいろな活動をはじめた。

三歳児のはじめは、楽器は幼児にとって遊具であったが、ハンドカスタやタンプリンをメチャメチャにたたいているうちは扱ひ方をおぼえ、上級生の合奏をきいたあと、すぐに「がくたい」をしたいといってきた。そこで最初は自由にたたかせ教師の合図（ピアノや太鼓など）でやめさせるようにした。また、曲にあわせてするとき、短いはやしことは、同じことばの反復、同じリズムの反復などがあるような曲を与えていくと（例えば「おはながわらった」の曲の……わらった……の部分だけをカスタでうつなど）、幼児はよろこんで満足げに、幾度も繰り返して、自分たちでグループをつくって、たのしんでいた。四歳、五歳ではこうした活動は、ますます活発になり、友だちの指揮に合わせて合奏したり、ピアノに合わせておどるなど、たのしい表現活動がみられた。

殊に、ピアノは、幼稚園でも自由にひけるということが、子どもたちにとっては家庭でお稽古のための練習でひくのととはちがったのしきがあるようだ。幼稚園でならった歌をさっそくさぐりびきしたり、友だちのひくのをきいたり、毎日毎日、たのしんで

自由遊びの中ではじめられたもの。中央の子は指揮をして→

↓でたためにひいている三歳児



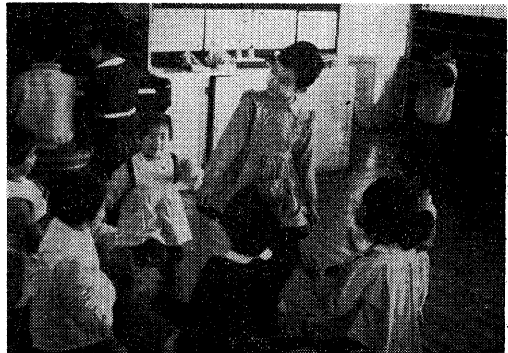
4歳児の楽器あそび

いた。

鑑賞

朝の幼児向けのラジオ番組を毎日流しているが、集まってきて、きいている子どもは大体同じグループである。こうしたことから、それぞれの幼児の音楽に対する興味を知り、好きな子どもにはレコードを自由にかけさせたり、もっと音楽にふれる機会を多く与え、また、普段あまり関心を示さない子どもでも、自分の知っている歌や曲には興味を

友だちのピアノに合わせておどっている五歳児



示してきいていることがあるから、幼児の知っている童謡などをレコードできかせたりして興味をおこさせるようにしていった。また、遊びのあとの休息、ひるね、食事の時間などに、らかな気持ちできかせるようにしていくと、だんだんに音楽をきくというのをたのしむようになり、五歳児では、曲をきいて、

その感じをつかむこともできるようになった。

次頁の写真は音楽をきいてかいた絵である。

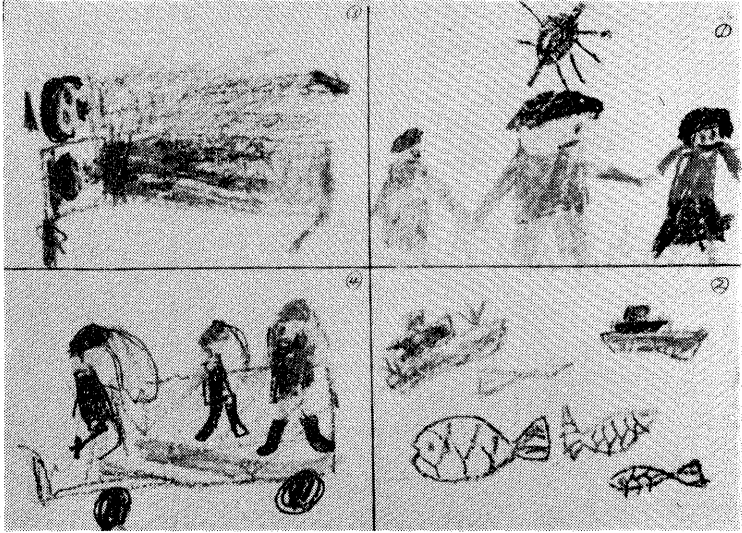
それぞれ、子どもなりに曲の感じをよくとらえている。

幼児の芸術活動は特に環境によって支配されやすいものである。

当園では幼児の自由遊びを中心とした保育をし、絵画製作なども、幼児が作りやすい時に自由につくらせるなど幼児の自発的な活動を重んじ、なお歌を教えたりする時も幼児のその時の遊びにあった歌を選んで教えるようにしている。

—A夫の作（男児）—

③トロイメライ：シューマン作 妹とひるね。 ①口笛吹きと犬：プリヨール作

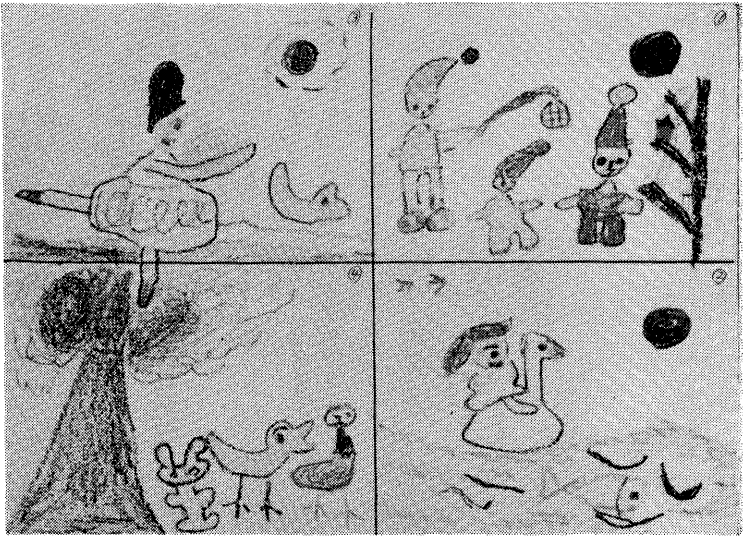


④熊ん蜂の飛行：リムスキーコルサコフ作 ②白鳥の湖(情景)：チャイコフスキー作  
消防車出動

また、幼児ひとりひとりの性格をよく知り、各人の発達にに応じて自信をもたせるように励まし、適当な刺激と機会を与えるなど環境をととのえ、その中で自由にのびのびと幼児のもっている創

—B子の作（女児）—

③トロイメライ ①口笛吹きと犬 こびとがおどっている



④熊ん蜂の飛行 ②白鳥の湖  
火山が噴火するので動物たちが逃げるところ

造性をのばすようにつとめている。しかし、まだまだ至らない点があるので、今後ますます創造的活動を多くするように努力しようと思っっている。  
(日本女子大学附属豊明幼稚園)

# 幼児の創造性を伸ばすための音楽リズムの指導



田代廣子

幼児期は環境に左右されることが大きく、何でも模倣をし、また興味のあるものには非常に関心を強く示すが、こうした時期に創造性を（特に音楽リズム指導について）どのようにして育てていくかは、この時期の発達に合わせていくことによりごく自然に育てていけるものである。

廊下にある大鏡の前で自分の姿をうつして手をあげてみたり、飛んだりしているが、そのうちに園内に流れてくる音楽に合わせて一人で手を振ったり、足をあげたりしているところを時々見受けられることがある。

また空を流れる雲をみてひとりごとのように「雲さん、雲さん、どこへいく」と、わらべ歌の一節の旋律をつけて口ずさんだり、このように幼児の生活の中でふとした機会に音楽的な面から

独創しているひとこまをみることがある。こうした場面から見ても、幼児の創造性の芽が出かけているわけである。

また教育要領にも大きく個の項目の中で示されている。

教育内容として、

- (1) 短い旋律を即興的に歌う。
- (2) 知っている旋律に自由にことばをつけて歌う。
- (3) 楽器を感じたままにひく。
- (4) 感じたこと、考えたことを自由からだで表現する。
- (5) 友だちといっしょに感じたこと、考えたことをくふうして

歌や楽器やからだで表現する。

があげられており、この指導にあたっては幼児の気持ちや考えを自由に表現させ、創造的な活動を楽しませて、意欲を高めるよう



にすることとなっているが、その指導にあたり横の糸として考えられる点は、

### 1 自然的にあらわれる機会をつかまえる。

自然的にあらわれる機会を、のがさずに指導していくことが最も大切である。幼児一人一人それぞれに個性をもっている。創造的なものを育てるには一様に取り扱わないで、あらゆる個々の場合を利用することである。であるから教師は、常に細心の注意をはらって幼児の行動とかつぶやきに注意をむけていなければならぬ。

### 2 興味や関心をもたせる。

自然や事物に対して幼児の興味や関心をもたせることは創造の第一歩であるが、これは教師自身のおどろきの態度や言葉により幼児自身が「オヤ、何であろう」「おもしろいぞ」と関心と興味を引き起こすものである。興味の対象となる情景の設定のくふうが大切なことである。そのとりまく環境が大切であるのもこうしたことからであるし、これが指導の中での導入の大きな役割となるわけである。

### 3 自信をもたせる。

小さなことでも幼児自身の考えたものをほめてやり、自信をもたせるようにし、また友だち同士で、例えば動きをみせあったり即興的に歌ったことをもう一度教師と共に歌ったり、また人の前で発表したりさせて自信をもたせることが非常に大切である。

### 4 教師の助言を適切にする。

教師の助言のしかたにより幼児の創造性が育っていくか、あるいは画一的になってしまいか、あるいはそのまま芽が枯れてしまいか、わかれる。以上が横糸であり、縦糸として考えられるのは次のことである。

#### A 題材の選択の必要性

幼児に対してどの題材からどのような経験をもたせるか、反対に経験をさせるためにどのような題材をもってくるかの両面から、題材展開が望ましい方向にいくことをみとおしてよりよい題材を選択する必要がある。また年間計画をたてる場合に、経験させておかなければならないことをうまく織りなすのに、幼児の生活を考えて選択をうまくしないとむだになる場合がある。題材は

それが望ましい方向に向かうためには幼児の学習意欲とレディネスが考慮されたものである。

ここでまず音楽リズムの領域で創造性を育てることにしほって論を進めるが、音楽リズムとして創造性を伸ばすために、内容としては要領の中でも五つ示されているが、主としてここではからだで表現することに重点をおいてあげていくことにする。何故ならば、私としては松江市音楽リズム研究部として共同で研究したことをもとにしたからであり、他の面はまたの機会にゆずることになりたい。題材選択の必要は一方創造性を育てるための段階的な指導をする上からもうかび出てくる。創造性を育てるにはそのもとになるものがなければならぬ。そのためには

○わらべ歌

○リズムカルな集団あそび

○基礎リズム訓練

○フォークダンス

○歌を伴うあそび

などをおりませて指導することにより、模倣から創造へと教師の助言によって移行させていく必要がある。こうした経験はかたよらないように指導されなくてはならない。

## B 展開について

### ④ 導入の興味づけ

興味のあるものに対しては予想以上に活動量、表現力を示すものである。そのためにはいろいろの方法がある。まず多いのが、話し合いであるが、題材に関して教師の話からはいったり、また空想的物語からはいれる。四歳においては簡単な情景を示して、これに対して知っている事柄について話し合ってから、そのものになりきって動く。動きをしながら情景を思い出させたり、観察したりして更に話し合ってから認識を深めて動く。

年長組は経験内容に応じて二、三の情景設定をまとめ、短い一つの物語として話し合いが十分に行なわれるように進めるが、その間幼児の模倣に対する良いくふうもできて、更に話し合いが活発となるよう模倣を劇的に運んで、内容を豊かにすることが、表現の興味づけになってくる。

年長、年少を問わず幼児の発言は特定の者に限られないよう、また幼児の発言は非常に断片的であることが多いので、教師の適切な指導助言によって要点外にそれる話の誘導と消極的な幼児への激励が必要である。

また一方リズム感覚を養う歩と歩の応用と、そしてその展開で、二人、四人組のあそびに移行し、楽しいグループあそびに発

展させることができることもある。

個性豊かに表現させる場合、題材によっては導入に話し合いをせずただちに模倣をさせて誘導をしながら導入するのがよい。この場合には表現させようとする情景などを、何らかの方法でみたり、あそんだりの経験の前に予備にさせておかねばならない。知っていることが一つの興味づけになるわけである。

⑧ 模倣内容のとらえ方

幼児の興味のある動物を例にとると、動きのもとになる歩の変化範囲を考えて情景設定をする。この場合には、速度とリズムの変化が伴う情景とする。昇る降りる速度の変化とか、小川をとびこえたり、方向をかえたりが模倣の内容となる。こうしたことにより積極的に興味を示して活動的に動く。そして動物の生活動態から情景設定することが、模倣あそびの学習となる。あそびの場の構成をくふうして与えることにより模倣活動は容易となり、まただんだん幼児なりに創造的に自分たちで場を設定したりして、ますます創造的な表現へと意欲をたかめることができる。模倣経験の少ない幼児には準備する材料の種類、量の増減が興味を持続に影響する。

例後記(27頁)のようにまた男女差のみられる対象に対しては、このような配慮により抵抗感が減少できる。象の小舎、友人の家、

一本橋、材木置場、ビニールテープで池を造ったり、また白墨で場を簡単に設定するなど情景設定を豊富にできるし、また幼児の表現活動をより豊かにしてよい変化をみることとなる。またあしかに教師が餌を与える役をすると、その後から幼児は匍匐態勢の活動がリズムカルに反復されて、興味は最高潮に達して、いろいろと表現が幼児自身でくふうされ創造されてきた。また場の設定のくふうは施設、遊具の使用から、友だち同士が交代しあって遊具の役をする。更にまた実際上の設定を省略してあそびの中であるものと仮定し定められた場所の活用によって充実を計ることもできるようになってくる。幼児の題材に対しての特徴のとらえ方は幼児のものの観方、とらえ方の特質がよくみられる。

蛙の表現の場合は直感的に観察をし、すぐに活動的な運動にうつるが、メダカなどはむずかしい。メダカは幼児として模倣する場合、活動的な運動がしにくく、模倣は一時停滞するが、助言により幼児のくふうの範囲は広がる。ただ題材としては、表現しやすいものとしにくいものがあることを考えなくてはならない。

◎ 模倣について

表現活動は幼児の模倣本能に基づいて、模倣的表現活動が多い。模倣は表現活動からしだいに創造的要素の多い活動へと発達してくる。他の行動を観察し、幼児が興味をもった行動を模倣

し、自分の想像を加えて他人の前に表現しようとする。模倣活動は次の段階がある。

・既得の経験をそのまま表現する模倣活動  
・あそんだ形をとりながら、過去に自分が経験したことを既存の形態で表現する。

・創造に近い模倣で模倣した形が学習した経験の中にない。  
・自主的な創造

こうした段階があるが、幼児の模倣性は非常に強いので一人の幼児が小鳥の型を表現するとすぐに他の幼児がまねたり、またリーダー的幼児の模倣により単一リズムとして一般化されて概念的な動き方になりやすいので、題材のつかまえ方や情景描写を豊かに与えるよう助言が必要になってくる。事実と想像をおりませて内容設定を豊富に与えるわけで、各個人に適當する受けとり方が可能になり個性的な動きの模倣ができるようになる。そしてやがて自分で発見して模倣できるようになる。

また助言のしかたで「○○さんは上手ですね」「○○にほんたによくてますよ」と漫然としたいい方をするが、「○○さんの手のあげ方は○○によくてますね」というように何をみるか目のつけどころに注意させて、更に対象の特徴に結びつくよう指導演言をする。そして幼児との問答によって何をどのようにする

かを気付かせ、さらに各自の動きへ還元して模倣を豊かにしていく。題材の観察によって自主的模倣経験を積み重ねていくことが重要であり、教師の思いつきによる幼児の模倣であってはいけない。更にその対象のものになりきるからだの動き方と、心の状態が望ましい。

鳥などの題材で伝統的とみられる特有のパターンがあり、概念的なとらえ方をする幼児があるが、模倣の容易な単一リズムの反復は幼児が動く場合、自分で発見する機会が見出しにくく学習効果が少ないので、なるべく自然的な活動としての模倣遊びを充実させなくてはならない。

以上からだで表現することについての指導の方法の要点について述べてみたが、要は幼児の発達に合わせて、幼児と環境の関係作用により、よい題材を選択し、計画は密にして劇的に題材内容をはこんでいくことが必要であり、模倣遊びは幼児の要求に応じて自発的に活動させ、画一にならないように注意していかねばならない。個性に応じて、各自の経験に即した模倣表現にとりくんでいく学習形態で進めることが望ましい。

次に幼児の活動と教師の指導事例を参考までにあげる。(パークの動物という題材)

幼児の活動状況

指導状況記録

イ、パークへ遠足にでかけ、見た動物の名前をあげ、興味のあつたできごとを自由に話し合う。  
 ロ、幼児の発言内容を深め、もつとも興味の持たれた動物である「猿」「あしか」「熊」を題材とする。  
 ハ、好きな動物になり、組み分けをする。  
 ニ、竹の棒の先に白墨をくくりつけ棒を大きく動かして、あしかの池、猿の檻、熊の檻をつくる。

イ、象、熊、兎、猿、あしかなどの動物の生活、動態がよく発言される。教師は発言の少ない幼児におもしろいようす、できごとを想起させるように助言する。動物たちの活動と共に乗り物の楽しさ、お弁当のおいしさなども話題となり楽しさが倍加され、ますます発言活発となる。  
 ロ、動物に対する興味、愛情を、彼らに餌を与える状態で表現する幼児たちの傾向をとらえ、動物ごっこが始められる。  
 ハ、教師の助言で大体三等分され、好きな動物の組ができる。  
 ニ、幼児は竹の棒で描かれる様子をよく注目し、いち早くその中にはいり、棒の先を見送る。さらに教師は椅子の脊に動物の絵を貼り、定められた場所にそれぞれ全員で繰り返しを言い合う。  
 ヘ、匍匐前進を緩徐に行ない後足が十分引きつけられては伸ばす前進となり力強く機敏に動く。

る歩き方をする。  
 ヘ、「あしかのまねのできる人」の発問で一男児が挙手し、指名され元気に歩く。  
 ト、「お猿のまねのできる人」の発問では挙手がなく、教師が模倣を始めると、幼児が喜ぶ。  
 チ、それぞれの場所につき、その動物になつてのそのそ、またはちょこちょこ歩く。  
 リ、教師は、それぞれの檻に近づいては餌を投げてやる。あしかたちは教師の投げる餌の動きに合わせて匍匐態勢より、膝を曲げてしゃがみ、立ちあがりながら跳躍する動きを素早く行なうのでよい模倣となる。  
 ヌ、檻を交代し、動物の模倣を交代して遊ぶ。

ト、教師の模倣は、両腕をよく伸ばし四つん這いとなり指先をまるめて、猿の感じをだす。  
 チ、同一のタクトを与えても適当にリズムをとって歩く、走る、小走りなどするので動物の感じは一応出る。  
 リ、檻毎の動物にそれぞれ特徴を与えてリズム言葉の助言をし、幼児はよい模倣をする。あしかの表現が良好だったので今一度示範させ、足の運び方のどこがよいかゆつくり説明して観察させ、各自の足を運ぶ要領を理解さす目的のためには、運動の要領を説明するためのポイントの把握、説明の順序、何をよく見るかなどが必要である。教師は素早く動いて餌を投げるので、早く移動してはジャンプを競う直観な模倣となる。  
 ヌ、教室の広さに比較して、狭い場所の檻なので動物の種類によっては、模倣の行動範囲が小さいのが惜しまれる。場所には常に最良の条件を与えたい。

(松江市立白波幼稚園)

# 幼児における創造性の機能と育成



篠崎謙次

「幼児に創造性を育てる」「創造性を育てる美育」というようなことが好んでつかわれるようになった。しかしこの場合育てられるべき「幼児の創造性」とは一体どのようなものであり、どんな性質をもった能力なのであろうか。創造性ということばが現場でしごく安易に無雑作につかわれているが、創造性そのもの、もしくは幼児の創造性の特質については一向に問われていないように思う。創造性とさえいえばそれ自体自明であるかのごとく、あるいはまた言葉の甘美なひびきやムードにひたって、それで創造性が養われているような錯覚に陥っているのではなからうかとさえ思われる。したがってわれわれはまず第一に創造性そのものについて考察し、とくに幼児の創造性についてその特質を把握しておきたいとおもう。

## 一、創造性

創造・創作・自己創造・文化創造など、呼ばれる。これらはす

べて自分らしい考えをうみ出し、自分らしい何物かをつくり出す働きである。そのように働く精神の傾向・能力・性質を創造性と呼んでよいとおもう。われわれは何を考え、何をしても結局は自分らしい考え方や仕方しかできない。たとえば上手な人のまねをしてみたところで、やっぱりいつの間にか下手は下手なりの自分らしいまねになってしまい、おのずとそこに自己がさらけ出されてくるものである。

人間生まれてからこの方、このように、自己自身の特有な感じ方、考え方、行動の仕方を通して生きてきたのである。すなわち個性にもとづいて自己をつくり出し、自己を創造しながら生を展開してきたのである。このように考えると、創造性とは自己が自己の生命を展開する原理であり、生命の必然的な機能であるといえる。したがって創造性はすべての人間・乳幼児・青少年・成人を通じてすべてのものに与えられている精神の働きであり能力で

ある。すなわち生きることそのことがすでに創造的に生きることであり、人間が機械にならないかぎり創造性の働かない生き方というものはおよそ考えられないといえよう。

このように創造性はすべての人間に与えられ、すべての人間は創造的に生きているのであるが、その働き・その発現にはおのずから高低・深淺・強弱がある。非常に独創的な考え方をするものもあればひとのあとから追いつけ模倣に明けくれるものもある。そこに独自の生命を發展させるためには、より奥深い創造性を育てなければならぬ理由があるのである。しかも自己実現・自己創造ということが現代的な意味において生きることの意味であり目的であるとするならば、今日の教育において創造性を高めることこそ、本質的に重要なことであり、人生の生き方を追求する教育の根本問題であるといえよう。

ところで創造性が生命の機能であり働きであるといっても、それは何らかの内容と結びつき内容をもたなければ働くことはできない。精神活動としての創造性はいまだ未発の状態にひそんでいられる可能性でしかない。可能性であるからある条件・すなわち環境や生活経験という内容を得なければ現実化しないのである。記憶力・推理力・想像力といっても、何を記憶し何を推理するかの内容がなければ、現実の力となってあらわれて来ないと同様である。したがって創造性とそれが現実化するためには如何なる内容が与えられるか、何を基礎とし何を土台として創造性が働き出し

働くものであるか——その基底となる内容こそ重要なものであると考えられる。

## 二、創造性の基底

創造性を刺激し、これに火をともして現実の働きをおこさせるものは、何といってもまず現実組織であり経験であるといえる。現実を正しく認識し広い経験を素材として、そこにゆたかな創造性がわきおこるのである。小説家が山の遭難小説をかこうと思ふとき、山や山の遭難についてあらゆる資料をしらべ、それだけでなく自ら危険を冒して冬山を経験しようとする。また詩人が郷土のうたや校歌などの作詩を依頼されると、必ずその土地や学校をおとずれ、その目その耳で特徴をつかまえようとする。このように事実につれ、直接に経験することによって、イメージがうかび、詩想がわくのである。また画家が千里を遠しとせず世界の風景にふれ、建築家が古今の代表的な建築様式をたずね歩くのも、みなこれ創作意欲をおこし、よりよき創造活動をなすための基礎づくりには他ならない、つぶさに事実を認識し豊かな経験をつむことなしには、創作の泉はすぐ枯れはてしてしまう。したがってこのような事実認識やゆたかな経験こそ創造性の源泉であり基底である。

幼児はいまだ未知・未経験な世界にあって、一つ一つの事実を自らの感覚を通してとらえ、経験をひろげていく。このような事実や経験にうち当たること自体に新鮮な興味や感動をおぼえ、彼

らの精神は躍動するのである。すなわち心はずんでおのずと想像性が刺激され、新しい感興がわきおこり、次々と新しい感じ方や表現などがあらわれてくる。このようにして幼児の創造性といえども無から有を生ずるわけにはいかない。必ずその基底に、現実認識・現実経験のひろがりが必要ならぬのである。この意味で幼児の創造性を活動させるためには、できるだけ事実によくふれさせていくこと、感覚的な経験をくり返し、つみ重ねひらげていくことが大切である。

### 三、幼児の創造性

「幼児に創造性を育てる」ということは、幼児に創造性のたねもしくは芽生えが存在することを前提としたことばである。創造性が生命の必然的な機能であるとすると筆者の立場からすれば、この前提は無条件のみにとめられなければならないが、いうところの幼児の創造性とは、一体どのような意味で使われているのだろうか。それは一般におとなたちがいう文化創造というような意味での創造性と同じ性質のものであろうか。もしくはまた幼児特有の創造性というものがあって、おとなたちがもっている創造性とは質的に異なったものと理解すべきであらうか。このような意味で幼児の創造性の機能・特質について考察してみよう。

一般に成人の創造性はつねに一定の目的をもち目的追求の上になつてはたらく性質をもっている。たとえば生活上のよい工夫を思いついたとか、部屋のかざりつけに新しいアイデアが生まれた

とか、主婦の発明工夫展などの創造的活動にしても、みな何かの不便を感じ、もっとよいやり方や便利なものはないかと考えて生まれたものである。単に思いつきのもの——あるいはそれを深めた程度のものであっても、それはみな目的に支配され、目的にそつて生まれたものである。

しかもこのような目的に支配されてあらわれる創造活動は、その目的追求がはげしく一途のものであればあるほど、精神の苦惱を経験する。学問や芸術上の創造、あるいは技術的創造（発明のごとき）など、おしなべて文化創造といわれるものは、単なる思いつきや表面的な工夫だけでは歯が立たない。もっと精神の深層にいき込んで徹底した思考活動をくり返さなければ成就しないのである。今までになくて誰れも考え及ばなかったものを、何人もなし得なかつたものを考えようみ出そうとする意志と努力、このような精神に支えられて創造性はその力を極限まで發揮されるのである。そこで創造者は、たゆまぬ探求をかさねるが、失敗に失敗がつづき、内心の苦惱を感じるのが普通である。

生みのなやみといわれるように、われわれが自分らしい、自分になつとくのかのいく何物かをくり出そうとするときには、必ず何らかの苦心・苦痛——さらに精神的な苦悩をすら体験するものである。いまわたしは「幼児の創造性」についての原稿を求められているが、ひき受けたもののはじめから筋書きがきまつているわけではない。そこでわたしは自分らしい考えをまどめしぼり出そ



うと苦悶する。それはわたしなりの一つの創造であるにちがいない。しかし書こうとする内容や表現が思いのままにすらすらと流れ出てきてくれない。書こうとする前に、ある期間何をどう書こうかと思ひ悩む。考えが固まらないのである。そこで自己自身の創造活動について過去の経験を思い浮かべたり、すぐれた創造者たちの創造活動についてしらべてみたり、創造性について述べられたいままでの論文を探し出して読んでみたりする。さらにまた幼児の精神の働き方についてその特質を明らかにしてみる。このようにして材料をあたためているうちに次第に考えがまとまり、固まってくるのである。そこでどのようにして道を立てて表現するか想をねって原稿紙に向かう。しかしいざ書こうとなると思うように表現できない。書いては消し消してはかく。原稿紙をむだにしながら創造活動は進められていくのである。そこではわたしのふだんの生活にみられないほどの精神の集中統一が要求されている。したがって原稿ができ上がるまではわたしにとって非常な苦しみである。このようにわれわれ凡人には、苦しみまでのきつい精神の集中統一がなければ、本当の創造はあらわれ出てこないし、創造性もフルに活動するわけにはいかないであろう。

ところがよく天才・名人・達人などと呼ばれる人が、神の啓示や靈感を得て一気にすばらしい芸術上の作品をうみ出し、学問上の新しい真理を発見し、あるいは人生の悟りをひらいたというようなことがいわれている。そしてそれは創造活動の極致であると

いってよいであろう。ここでは一見何の苦痛も努力もなしにすばらしい創造活動が行なわれたかにも見える。しかし、それは皮相な見方であって、無為にして神の啓示や靈感はあらわれるものでない。すなわち安逸をむさぼり、平凡な生活を送っているものにインスピレーションがあらわれることはないで、それは泥まみれの精神の苦悶の賜である。したがっていかなる天才・名人・達人たちも、自己の創造活動について、決して安易に易々として行なったものでないことを強調する。彼らは絶えざる日常の努力、苦しい修業や練習錬磨によって精神を統一し、凡人に及ばぬ境地に到達したものである。釈迦がある日ふと悟りをひらいたのも、衆生済度の長い精神の苦しみをのり超えた結果ではなからうか。したがって天啓・靈感・詩想などが湧きおこるためには、そこに至る過程に長い苦悶の歴史がひそんでいることを忘れてはならない。

しかし一般によいアイデアが生まれ、インスピレーションがあらわれるのは、必死に目的追求の努力をしているときよりも、むしろつかれはてて、一時精神集中の努力を休止し、目的から解放されて精神の緊張がほぐれたときにあらわれるものだといわれる。たしかにそれは目的から解放され精神の自由な状態においてある日突如としてあらわれる性格をもっている。けんめいに目的を追っているときは、精神の緊張が一つの方向にだけ向けられて、考え方の転換ができないために新しいアイデアが生まれないのである。ところがそのような一方的な緊張から心が解放されて

無心にもものを見、ものにふれたとき、はっと気がつく。それが偉大な創造につながるかどうかは、それ以前の努力や錬磨に関係していると思われる。目的を忘れ、目的から一応解放されたとき、無為・無意識・無目的に徹したときに自由な見方ができ、精神活動の質的な転換・飛躍があらわれるのである。

右のような創造性の極致は、その無目的、無意識・無心の状態において、幼児が無心に遊んでいるときの心の状態にはなほだよく似ている。雑念をはらい童心にかえったときに悟りがおとずれるといわれるのも、このことを示したものはなからうか。しかしいうところの童心とは、幼児がいまだ経験や目的意識の未分化な状態における童心とは、精神活動の質が異なっている。幼児にあっては精神の苦闘・苦惱・まよいを感じるということはない。単純で純真そのままの童心がそこにある。したがって幼児の精神がいかに創造的であるといっても、成人のそのように長い間目的追求のプロセスをたどって働きつづけるものではない。そのため心のくるしみを味わうことはないのである。むしろ興味を感じたものに無意識的に心がひきつけられて楽しいのである。それは成人のように意識して集中するのではなく、無意識・無目的に対象に心がすいつけられ、心がうばわれるのである。このような状態において身体をうごかしたり、物をつくり線を描き色をぬっているうちに、いままで経験したこと、知っていることなどが次々と精神活動の流れにうかびあがり、それが現在の行動と連想的に結

びついていく。幼児はまだおとなの習慣だとか型だとかもしくは遊具の目的などにとらわれないから、とっぴょうしようもないことに思いつくのである。またアニメズム・相貌的知覚・共感覚などの特徴によって、成人にはおよびもつかない感じ方や考え方をする。

幼児の精神活動は流動的で一つのものの一つの考えに固執することがないから、思考は次々と回転していく。いわばひよひよいと思いつくままに表現するというのが幼児の心の働きであり、このような精神の働きが創造性と呼ばれる。いわばはじめから目的意識から解放された天衣無縫・まったく自由な遊びの精神から出発している創造性である。したがってそれは自由に自然にうかび上る想念であって、空想性や想像性を基底として働くのである。

右のような意味で幼児の創造性は、自由で楽しい雰囲気の中でなければ発揮できないものであるといつてよい。

#### 四、幼児の創造性と模倣

幼児は模倣の天才である。彼らの語ることは、うたう歌、描き出す絵、さては遊びなど生活のほとんどすべてが模倣から出発している。コマ・シャルソングなどはおとな顔負けで何でも知っているし、奇妙な動物をかくと思うとこれも怪獣映画の影響である。オリンピックがはじまればオリンピック遊び、パラリンピックのときには三輪車をうしろ向きに乗って両手で車輪をまわして競争するし、お祭りがくればオミコシゴッコ……見るものきくもの即座にまねてしまう。わたしの一家が田舎へ疎開したころには

よくやみ商人がめぐってきた。四歳になる男の子が大きな風呂敷にガラクタおもちゃを一ぱい包み、それを首に巻きつけてどこかへ行ってしまふ。どうしたのだろうと思っていると、しばらくして玄関の戸が開き、「コンニチワ……〇〇からヤミヤチャンです。……ヘッケンはイルマせんか……」また兄弟して大きなかごを伏せて中に入り、わどり、ごっこ、ひとりりが四つんばいになって口にひもをくわえ、ひとりりがそのひものしを引っぱって馬方ごっこ、さては棒を肩にかついでためか、つぎ遊びまで表現する（その動作が奇妙によく似ている）にいたっては模倣というよりも、それ自体創造的な活動であると感じたものである。

このように幼児は、おとなが思いもかけないことに思いつき、創造性をはたらかして遊ぶものであるが、しかしそれは大部分何かのまね、模倣であることが多い。しかし全く型どおりのまねではなく、そこに子どもらしいアイデアによる変形があるのである。わたしはしばらく前に、幼稚園で五、六人の男の子がテニスボールを用いて野球遊びをしているのを見たが、そこで使っているバットがなんと大きな木製のシャベル（砂場などを掘り返す）であるのにはおどろいた。これなら先が幅広であるからボールが当たり易い。またベースは一塁しかなく、しかも走者にボールを投げつけてもアウト。これは彼らにまだ十分な捕球能力がないところから自然に考え出されたものであろう。野球というむずかしい遊びをどうしたらうまく遊べるか、彼らは彼らなりに自分たちの

興味や能力に合ったやり方を工夫し規則を変え単純化して遊んでいる。そこにはまさに子どもらしい工夫と創造が働いているが、もとはといえば野球をみてる模倣である。幼児はこのように興味を感じたものを何でもとり入れ、模倣し、模倣しながら創造していく。むしろ模倣の中にこそ創造があるといつてよい。

このように考えると模倣と創造とは決して相互に矛盾し対立して働くものではない。創造性の価値を高く評価するあまり、模倣をもって価値なきもの、創造性に反するものとして排除することはあやまりである。（もちろんここでの模倣は単なる機械的なまねのことをいっているのではない）無から有は生じないように、幼児の創造活動ももとはといえば見たこと、聞いたことのまねであり模倣である。模倣しているうちに、幼児精神活動の特質にしたがって（想像性・空想性・共感覚など）いろいろな形・色・音などが表象となつてうかがい上がってくる。幼児の創造性とは、実はこのように心の中にかび上がった表象をつぎつぎと子どもらしく表現する——このような心の働きの中にあらわれてくるプロセスと考えることができる。子どもとおとなでは精神の働き方が質的に異なるものであるから、おとなは子どもの奇抜な着想におどろくのである。しかしそれが直ちに高い文化の創造性につながると考えるのは妥当でない。（幼児期にすばらしい造形のアイデアを示した子が大きくなるにしたがってつまらない表現しかできなくなるといふような例が少なくない）なぜなら幼児の創造性

は、ある場合は根拠のない空想に根ざすものであり、またある場合未分化な共感覚のもたらすものであって、現実から多くの距離をへだつものであるからである。そしてこの現実と幼児の創造活動との距離をちぢめるものは、事実にもつて経験をゆたかにし、現実を卒直に認識するようになれば、それにもつて創造活動も質的に高まり文化創造への方向へ伸びていくのである。

### 五、幼児の創造性を育てるために

それでは右のような考察にもつて、幼児の創造性を育てるにはどのような配慮が必要となるであろうか。

#### 1 絶えず現実認識に帰る

自由に創造活動を行なうことが根本であるが、ゴジラもラドンも鉄人や黄金バットも現実には存在するものでないことを知り、現実と空想との区別をつけること空想的なものから実存のものへと目をむけていくこと。実際に存在するものには多種多様な存在の仕方があることに気づかせることである。そこから多様な思考活動が生まれ発芽してくる。

#### 2 経験をゆたかにする

感覚を通して身体でぶつかっていくような経験を豊かにしていくこと。経験は創造性を活躍させる場所であるとともに絶好のチャンスを与える。貧弱でせまい経験から豊かな創造性は育たない。

#### 3 自由に子どもらしい表現をする

自由な雰囲気の中で、子どもらしく表現することである。形や線・音程やリズムあるいは動作の正確さを要求して、外から圧力をかけたり型にはめすぎると、精神の働きが一方に硬直して、自由な感受性、のびのびした活動がはばまれ、創造性は枯渇する。この意味でしつけも型にはめきびしすぎると創造性を疎外する。とくに幼児期では身体的にも精神的にも、ものごとを正確にみたり行動したりする能力は未熟である。したがっておとながみて整った形や正確な動作を期待することは良策でない。

子どもは子どもらしい表現法をもっている。たとえおとながみておかしくとも、いまは子どもの表現法をみとめはげまし伸ばしていくことが次の時期への発展に役立つものである。早く幼児時代から音楽やバレエ美術遊芸ことなどの基礎訓練・基本となる型を仕込むことは、将来の専門家を目指す以外適当でない。それは幼い魂を圧迫し興味を失わせるおそれがあるからである。

#### 4 表現をくり返す

表現をくり返し、数をかけることが必要である。造ってはこわし、こわしてはまた造る。そのような活動自体があそびであり、そこに興味を感じるのである。したがってたとえでき上がったものがどのように貧弱で、まずいものであっても、「できた、できた」とよろこんでいるのが幼児のいつわらない姿である。幼児の活動はでき上がったすばらしい作品がめあてでなくて、作る働きそれ自体が目的である。そこでは完成のよろこびと同時に活動の

よろこびが大きく作用している。幼児がせっかくなりに作られた作品を無難作にこわして何べんも作りかえるのは単に破壊本能から来るのではなくて、このような活動↓完成のよろこびをくり返し味わっているのである。

また人は機械ではないから同じことを何回くり返しても全く同じ表現、同じ結果は得られない。そこにいままでとちがった形色・線・動作などがあらわれていることに気がつく。それがまた創造性を刺激するのである。そして新しい変化がおこる。幼児はよく毎日毎日同じことをして遊んでいてあきないものだと思うが、くり返している間に身心の機能が練習され、いろいろな遊び方に気づき、遊びが次々と変化し発展しているのである。つまり幼児は日々に新しい経験をしているのである。一本の線をかいているうちに、まるになり四角になり、それが人の顔にみえたり自動車のようなかっこうであることに気づく。この気づきが次の創造活動を刺激して生み出していくのである。

このように表現をくり返すことによって創造性は触発され高められるもので、できるだけくり返しの機会をつくり、くり返しのきく材料を与えることがのぞましい。たとえば遊びは子どもの生活から生まれたごっこ遊びのように役割を交替し、道具などをつくり取り替えたりして遊べるもの、造形では砂場や粘土のように作ったりこわしたり自由にできる活動こそ創造性を盛んにする最もよい教材であるといえる。

## 5 ひとのやり方を模倣する

すでにわたしは模倣の中に創造性がはたらいっていることを述べた。この意味でまったく模倣のできない子どもは創造性も働かない、いろいろなやり方や考え方をまずまねてやってみる。そこから自分のやり方や考え方のヒントが得られる。未経験な自分だけのせま苦しきにとじこもらないで、心のまどをひろげ、できるだけ多くのことをまねてみる必要がある、ここでいう模倣は機械のように一つおぼえのまねをすることではないこともちろんである。

### むすび

「幼児に創造性を育てる」というと一般に絵画製作や音楽リズムの指導の問題と思われ易い。しかしそれは幼児の生活全体の中に展開される必然的な働きである。幼児の生活は大部分が遊びであるから、遊びの中でこそ幼児の創造性は全的に発揮されるようになってよい。もちろん造形活動や音楽リズムにおいて創造性を育てることは重要なことにちがいないが、もつと遊びの中でどのように創造活動がはたらくか、創造性がのぼされるかを問題にしなければならぬとおもう。いうところの絵画製作や音楽リズムにおいては、でき上がった作品や表現の技術にとられることなく、製作活動・表現活動そのものを重んじ、自由に創造性をはたらせる場所と機会を準備して、つくるよろこび、表現する楽しさを味わわせる。かくて身心の機能を練習し精神の解放と安定に導くよう指導したいものである。

(宇都宮大学)

## 昭和の幼稚園の歩み

### 私の経験

八坂富子



昭和七年から十一年まで

東京の都心部築地の幼稚園に通いはじめたのは昭和七年の春であった。「京橋朝海幼稚園代用保母を命ず、月俸三十円を給す、東京市」という立派なすかしの入った辞令をいただいたのは何日かたってからであったろうか、園長さんに連れられて区役所へ行き区長さんの手から渡されたように思う。学窓を巣立ったばかりの新米保母がこの日からスタートしたのである。それから四年五ヶ月短期間ではあったが勤務のこと、施設設備のこと、保育内容のこと、すべてについて白紙の上にあぎやかに染めていったその頁をめくってみると感慨ひとしおのものがある。

女学校の延長のような気分で進学して倉橋先生の講義をほれほれと聴きながら若き胸をおどらせたものである。そんな私にとっ

て朝海幼稚園の毎日は驚くことや壁につき当たることの連続であった。

#### その頃の朝海幼稚園

この幼稚園は明治時代の創立で専任園長千葉ひで先生は創立当初からこの幼稚園に三十年勤続して退官される二年位前であった。本郷第一幼稚園の小向きみ園長、四谷幼稚園の山下つや園長とならんで女性専任園長三羽鳥の一人であった。

今考えてみると随分信念を持って独自の保育をしておられたと思う。新参保母の私は先生の手足になってくるくると動きまわることと二十恩物の指導内容や指導方法を習得することで精一杯であった。

幼稚園の規模は三年保育四学級一六〇名の幼児で職員は園長と

保母四名、事務員一名、小使三名（男子二、女子一）の九名で多分全員公費の職員であったと思う。

園舎は新築の鉄筋三階建校舎築地小学校の一階南側全部が園舎にあてられていた。窓の高さも低くなっていたし、保育室四の他に遊戯室、職員室、小使室、倉庫など必要な設備は整っていたから多分最初から園舎として設計されたものようである。冬はスチーム暖房であったし、トイレは水洗、当時としては新しい設備であったかも知れない。床は板張りで奇麗に拭きこんであった。特に衛生については特殊な設備があつて食器の蒸気消毒と恩物や玩具のフォルマリン消毒を実施していた。

定期身体検査も区内の公立学校合同の計画であつたのかも知れないが、検査当日は園医の他に全科の専門医が遊戯室のコーナーに前日から器具を据えて丁寧に検診をしていたようである。疾病異常の解説や事後処置などが印刷物になっていて結果を家庭へ通知する時にそれをつけて渡していたようである。園医の巡視が月に二、三回はあつて、月末の府知事宛の衛生関係の報告書に巡視何回と書く欄もあつたので確実に実施されていた。

施設の面で一番困つたことは専用の運動場が無いことである。遊戯室のベランダから隣接の公園へ降りられる道がついていて、役所が了解の上で一日の内、時間を区切って公園の一部分を縄張りをして幼児全員出して遊ばせた。当時は財界不況な頃で公園の

ベンチには、あちこちにルンペンがひるねをしていたものである。小使いさんに「公園に出たいから支度をして下さい」と頼むと先ず通路の鍵をあけて、公園に縄を張り、ねている人を次々におこして、のいてもらう。それから重い箱づらんこや遊動木やシーソーを二人がかりでかついで出て梓にかけそれからやつと子どもを出す始末である。幼稚園にとっては心臓部である運動場の無い悲劇をしみじみ味わつた。

その頃の公園には深々と小砂利が敷きつめてあつて、走ると足が後へ戻つたり砂利がスツクの中へ入つたりして痛い。それでも当時は青かつた東京の空の下で、思い切り走りまわるのは楽しくあつた。まわりの植込みには黒い土が見えるけれどくさりで柵があつてはいれない。自分の幼い日に毎日遊び馴れた数寄屋橋公園の植込みに毎年赤い実のなる木があつた。それにひかれて、つくいくりをまたいで赤い実をむしってしまった思い出が忘れられない。都心の子どもには土を踏むことが無い。土からじかに生えてくるものにたまらなく愛着を感じるものである。保育室の出窓の下に僅かなあき地を利用して砂場があつた。管理はよく行き届いていたが一日のプログラムや人数の関係で自由にはいって遊ぶことができなかった。一学級ずつ素足になつて身支度をして保母引卒の下ではいって遊んだ。素足にふれるきれいな砂の感触は何ともいえない。はいつている間だけは砂の上の自由を満喫した。

学級経営については第一年目は二、三年保育新入児四十名の学級を園長先生が担任をされて私が助手をつとめた。一日の保育プログラムは先ず会集から始まる。保育時間は平日は四時間で九時～一時まで、夏は八時半～十一時半、冬は九時半～一時半であった。園児は魚河岸の子どもが大部分で就任当時は魚のにおいが鼻についてならなかったがやがて馴れると平気になってしまった。区内の小学校にはほとんど公幼が併設されていたので、それでも歴史が古くて、園長への信頼から新橋、銀座方面から車で通ったり佃島から渡船で通っている子どももあった。

その頃の保育日誌や記録をたどってみると、週案と実践記録を同じ枠に書くようになっていた。

第週	自		月		日	検印	受持 保母
	至	月	日	日			
種目 会集	曜日	月	日	気	温 前	略	略
	曜象	日	象	度			
談話	手技	遊戯 唱歌	要	摘	度	略	略
出 席	入 園	退 園	欠 席	略	略	略	略

大正十五年の幼稚園令公布後であるから観察が保育項目にはいなかったわけであるが、この枠の中では談話の中に庶物語として度々出てくるようである。土曜には次週の週案を枠の中に書いて下さるので私はそれに基づいて教材の準備をしたり、当日は指導を受けるばかりの体制にして園長先生をお迎えに上がる。先生の保育中は手足になって動きまわるというシステムで一年間を過ごした。二十恩物の手引書のようなものも無かったし、新しい項目が出てくる度に扱い方や指導の段階などについて学習し、新しい知識や技術を蓄積していった。

### 第一期保育日誌より（昭七、年少組）

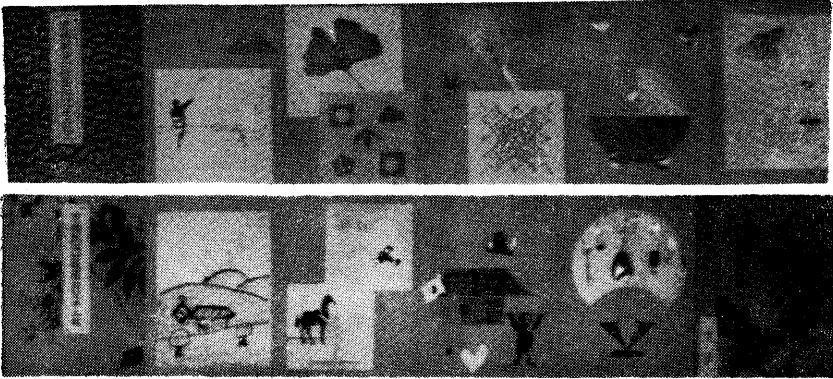
#### 会集 朝礼、訓話

入園につき心得、長者を敬うことにつき、独立心養成につき、日曜日の心得注意、泣かぬ約束をなす、長者の言葉を守ること、前日参観ありし王殿下のことにつき、小遣を使わぬこと、いつわりを戒む、祭礼につきての注意、兄弟と仲良くすることにつき

#### 談話（観察を含む）

● 童話 桃太郎、金太郎、舌切雀、牛若丸、大きい玉の話、猫のお見舞、海軍記念日につき、三匹の猫、時の記念日につき、兎と亀、花子の帽子、飛行場見学につき、七夕星につき、平竜さん権竜さん、お盆につき





京橋朝海幼稚園幼児手工帖

- この折手本は毎年年末に幼稚園が園児に贈るプレゼント。
- この表装ができてくると学級担任はどの子どもにもこの頁を全部うめるだけの手工を考えて作らせきれいにはって休みになる前日に持たせて帰す。
- 表紙の紙は保護者会長（銀座のむつみ屋）から寄付によるじゅうたんやかべ紙の見本帖，表装は東京フレーベル館が労をとる
- 黒表紙昭和七年度年少組
- 花模様赤表紙八年度年中組

●話し合い 前日のことを各児に問う

●庶物話 雀、猫、兎の特徴、虎

●言葉の練習

●手技

●豆細工 火箸、魚、うちわ

●粘土細工 林檎、蜜柑、ばなな、随意

●きびから細工 傘、手桶、兎

●紙褶 山、富士山、舟、月、桃、蝶々、屏風、扇子、二軒家、オルガン

●画方 随意、遠足につきて、林檎、蜜柑、ばなな

●つなぎ方 桜、風車、紋型、雀

●紙貼 桃、花見、鯉のぼり、金魚、兎と亀、軍艦、猫のお見舞、お祭りのちようちん、夏帽子、岐阜ちようちん

●木の積立（恩物積木のこと）

●柱、汽車、鉄橋、門、兵隊さん、舟、オルガン

●紐おき 池、山、金魚、舟

●排板 金魚

●排箸 随意

●遊嬉唱歌

行進、風車、汽車、桃太郎さん、いぎこげ、だるま、桃太郎、雀の子、金魚、開いた開いた、金太郎、蝶々、飛行機、雀

雀、笛と太鼓、雀、水あそび、鳩ぼつぼ、かたつむり、でんでん虫、牛若丸、ほたる、とんぼ、お日様、雨降り、君が代

### 摘要

靖国神社臨時大祭につき休園、天長節の式挙行、例祭につき休園、端午の節句会挙行、ジューバル王殿下御来園、王殿下より御下賜の菓子を与う。春季遠足実施、身長体重胸囲測定、定期身体検査実施、砂遊びをなす、鎮守祭につき休園、笹に各児の作りたる物を吊さしむ。うちわを与う。摺紙を与う。

こうしてみると手技が保育内容の中で大きな部分を占めていたようである。

唱歌については文語調の歌詞で、おとぎ話の長い物語や、生活の歌でも明治時代からうたいがれたものでは無いかと思われるもの、私が幼い日に祖母や母から聞いたことのあるなつかしい旋律もあった。系譜なども無いので、はじめてきく歌は範唱されるのをきいて、さぐりびきをしたり、採譜をしておいた。その二、三をあげると次のようなものである。

●風車(1)風車 風の まにまにめぐるまに  
やまずめぐるも やまずめぐるも

(2)水車 水の まにまにめぐるまに  
やまずめぐるも やまずめぐるも

●だるまさん

ころりころりところがって ひょこりひょこりとおきあがる  
足も手もないそのくせに さてもふしぎなだるまさん

●いぎこげよ

いぎこげよ いぎこげよ

あまたのふねに おくれずに

●大江山

昔丹波の大江山 鬼共多くこもりいて

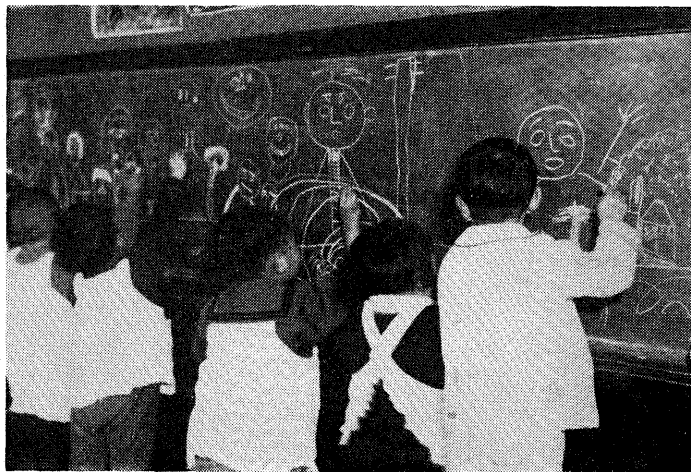
都に出ては人を喰い 若き娘をぬすみゆく

源氏の大将頼光は 時の帝のみことのり

お受け申して鬼退治 勢よくも出かけたなり(以下略)

勤務上のこと研修のこと

同じ屋根の下に二人の長(校長、園長)が両立していたので廊下の境の二枚戸が固く閉ざされたまま、開いたことが無い。宿直は二人の小使さんが交代で泊り、休日日直は四人の保姆が交代で勤務に付いた。平日の朝は早出が始業一時間前、その他が三十分前に出勤して玄関で園児を迎える。園児の通園は家庭から送り迎えをする。帰りは交通当番が築地の電車通りへ出て横断する子どもをの安全を見届けた。本願寺の方の自動車道より電車道の方が危険だったのは今昔の感がする。勤務中の服装は黒一色で、黒い袴に黒い上っばりで身をかため、襟元から若やいだ半襟がのぞくのも気兼ねなような雰囲気であった。園長先生だけは紺を着ておら



れるのが目についた。就任するとすぐえび茶の袴を全部黒に染め替えたり、黒い上っぱりを新調した。六十歳の園長先生が紺を着ておられるのに、十九歳の私がどうして黒装束に身をかためなければならぬのかしらと素朴な疑問もわいたが、きびしい試験に

あう度にそんな疑問は解消してしまつた。若い二十代の先輩の先生が二人で何かと話しながら、くすくすと内緒で笑っているのを見ると気味が悪かつた。

後日兼務園長時代に

なつて小学校との通路が開放されてから教頭さんはいつて来られての第一声に「幼稚園は修道院かと思つた」ともらされたのも、もつともなことである。

保母の研修についてはしばしばその機会に恵まれた。東京市内に五〇前後の公立幼稚園があつたであろうか。それらの団体東京市保育会が主催して講習会や研究発表会が開かれた。併設園の講堂や小学校の音楽室、工作室の施設を開放して校長さん自ら専門分野の指導に当たつて下さつたこともある。

現場から木工の技術習得の要求にこたえて常盤小学校の工作室で木工の実習をしたことがある。園長さんの指導で切つたり削つたり、塗つたりして出来上がった庖丁さしは後日世帯を持つてから長くお勝手で重宝したものである。また番町小学校の音楽室で講師のお顔がはつきり浮かんでこないが、音楽鑑賞のことで「美しい曲をきいてどんなイメージがわいてくるか」ということであつた。くりかえしピアノできいた雨だれの曲、五線紙をめくる度にあの曲が出ると思ひ出す。

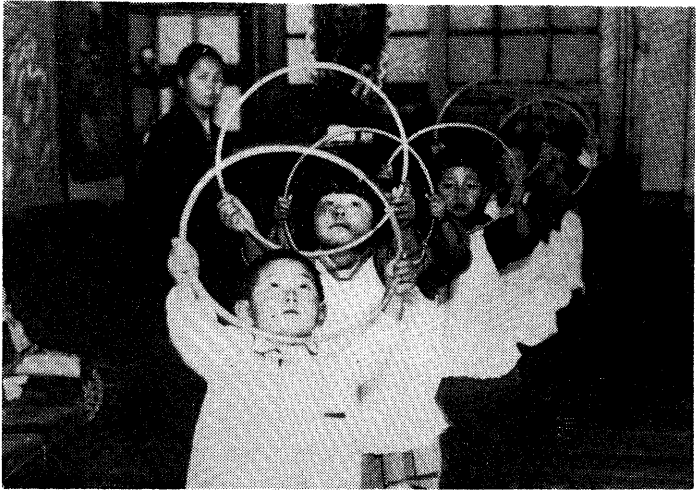
日本幼稚園協会の主催でフレイベルの生誕一五〇年祭が開かれたのもこの頃である。

お祭の水のバラック講堂で有院先生が父を語る如く瞑想をなさりながら語られた記念講演が目につかんでくる。戦後再度現職についてから、はからずもフレイベルの百年祭を広島で開催する機



会に恵まれて、あの時の記録を「幼児の教育」で読みかえした。

バラック講堂で思い出す研修に「えほん唱歌」の講習会がある。ちょうどその頃、春夏秋冬の巻が順次教育音楽協会から出版されて、船橋講師から直接指導を受けた。はじめてきく歌詞や旋



律を絵本を見ながらうたうのは正しく新鮮な感じがした。家へ帰ると片端からひいてみては吸収したものである。

今でも愛唱されているチュールリップや鯉のぼりがそれである。

夏休みにはお茶の水の講堂で文部省主催の講習会が開かれて毎夏参加した。バラック講堂で人形芝居爆弾三勇士の名演技を見せていただいたのを最後に舞台は現在の大塚へ移った。

倉橋先生の「保育法真諦」や「系統的保育案」が出版になる直前であったので講義の内容はそれらの理論の体系をどくと話された。当時は演台でマイクもお使いにならなかつたように思う。私なんか先輩の同伴として後の方の暗い座席で、かすかに聞こえてくるお声を一生懸命にノートした。講義の後には質疑応答の時間が設けられ、前の方

の席から活発な誘導保育に対する反論や質疑が交わされた。真諦の初版が出版されると、その実践編は在学中に既に発足していたもので教育実習を通して身近なものに感じた。日本幼稚園史の初版が出たのも、その頃で、自分のやっていることを歴史の上に位置づけて再認識することができた。

話は少しさかのぼるが専任園長時代に甲辰保育会と称する組織があつて、一部の公私立幼稚園合同の団体でこれにも研修の機会があり、千葉先生のお伴をしてよく参加した。早蕨幼稚園で久留島先生から童話や時局談話を拝聴して独特なお話の味に接する機会も何回もあり、又瑞穂幼稚園では土川先生の指導でおどろき続けて若いエネルギーを発散したものである。

母校でも緑会の継続研究会が毎月開かれて倉橋先生が現場の悩みを聞いて下さったり、我々のうすつべらな理論を拡げたり深めたりして下さったようである。時には外来講師の指導を受けることもあり、内山先生の童話、葛原先生の童謡、曾根先生の英詩、武岡先生の声楽など頭の中に畳みこまれている。

### 兼務園長時代へ移行

就任第二年目を迎えて漸く年中組を担任させてもらうことができた。監視されているような雰囲気の中での学級経営は苦しかったけれど一度消化したものを自分の体から出していくことは一歩

進である。新しいものや変わったことをする時は放課後先輩の先生立合いのもで演出して園長さんに見ていただかないと心配で実行に移すことができなかった。こんな空気の中で手製の人形芝居も実演したり遊戯の新しい教材も少しずつ取り入れるようになった。根強い封建性の中で苦しみながら一年程経過した時、漸く任用替の申請をして下さったやうで九月頃「京橋朝海幼稚園保母を命ず、七級下俸、当分月俸三十三円を給す、東京府」の辞令を受け取ると間もなく千葉園長退官、廊下続きの小学校長が園長を兼務することになった。

これを機会にいろいろの変化が起こったのは当然である。廊下の境界の扉が開かれて小学校と自由に往復ができるようになり、幼児も校庭の外階段を通して三階の屋上に連れて行くことができるようになった。大気を胸いっぱい吸って、みんなで作った凧を持って走る。風に乗って糸の長いのはどこまでもあがっていく。糸の出つくした凧が小さくなって青い空に悠々と泳いでいるのは実にいい気持ちである。空を征服したやうな満足感がみなぎる。幼稚園から小学校へ通じる最初の小室が女子教員の更衣室である。幼稚園にも鍵が渡されて一緒に使うようになった。その頃から通勤は和服、作業衣は洋服に切り替えて身も心も軽くなった。保育内容についても一八〇度の転回することは不可能であったが与えられた条件下で精一杯の改善のできるところは改めた。

兼務園長になって二代まで、主任の先生が三十年代で、四人の保姆は二十代という若い者ばかりの楽しい生活が続いた。春秋二回の遠足も動物園と植物園の反復であったのが郊外の方へ出ていって自然に接する機会も持つようになった。幼稚園の二階が音楽室であつたが私たちの希望が入れられて校長さんのとりなしで週一回のレッスンに通うようになったのもこの頃からである。能率をあげるために平素の保育にも馬力をかけた。

研修のことで特にこの時代に盛んであつたのは京橋区保育会の組織研究であつた。区内に公幼が七園位あつたらうか。五項目毎に部会を持ち全員がどの部会かに属して教材研究を継続してやつた。我々がその項目で一番困っている問題をテーマにとりあげて共同思考をしたり資料を持ち寄っては討議をした。壁に突き当たると会場校の校長さんが相談に乗って下さるといふ具合である。

私が属していた談話部会では年中行事に関するお話をどのようにするかについて毎回資料を持ち寄っては討議したものが、粗末ながり版刷りにしてまとめてある。童話の指導法については研究保育として批評会を持つようなこともあつたように思う。また教育紙芝居が普及していなかつたので、絵ばなしと称して部員が腕によりをかけて製作したものを発表会として反省会をしたこともあつたように思う。このようにして私にとっては希望を持って歩み出した仕事ではあるが結婚を境に一応幕を閉じた。

### 戦時中園児の母親として（昭和十九年頃）

戦果はなやかな頃、大阪のある私立幼稚園に長女が通っている時にたまたま参観日に保育参観をしてびっくりしたことがある。遊戯なんかを見ている間は「ああ良かった。家の子も楽しそうに、ついてやっているわ」と一安心、やがて年長児が保育室に集まって先生の指導で宣戦の御詔勅の復習が始まつた。ある優秀な男の子を指名されると一人立って鮮やかにあの長い御詔勅を最後まで立派に暗誦して、並みいる母親たちをびっくりさせた。私は思わずぞっとした。多分家の子どもはそれを覚える能力も無かつたのであろう。平素家へ帰つてもそれらしきことを口にしたことも無かつた。

それよりも毎日幼稚園から帰ってくると、口ずさんでいる歌が私がいづの間に覚えて、一緒に歌つたものである。誰の作詞か作曲か知らないが、今は亡き長女の思い出と共にその歌を忘れることができなない。

兵隊さんの手はかたくて大きい  
敵をいらんで鉄砲もつて

ドドンとたまをうちだす時は  
強い手だよ 本当だよ

（広島大学附属三原幼稚園）

# 生活の中に園芸を(三)

浅山英一

## 子どものための花作り

〓秋からの準備を〓春になると全国各地でも、「さあ、春だから草花を植えましょう。たねもまきましよう」というわけで土に親しむ姿がみられます。結構なことですが、春になってから咲く花を植えるのでは、バンジーにしてもデージーにしても一株いくらかと計算するとかかなりの費用がかかります。もしその費用で秋にたねを買ってまいておくということなら百分の一くらいの経費で済むものを、秋には手をかける人が少ないものです。ヤグルマギク、フクロナデシコ、ナデシコ類などは丈夫で、かりにまき放しにしておいてもけっこう立派に花が咲いてくれます。

また、春になってからたねをまく草花類は、夏から秋にかけて咲く性質で日本中どこでもやっていることです。

草花類は四月から五月にかけて咲く花が圧倒的に多く、しかも

この頃に一ばん花がよろこばれ、かつほしがられるものです。

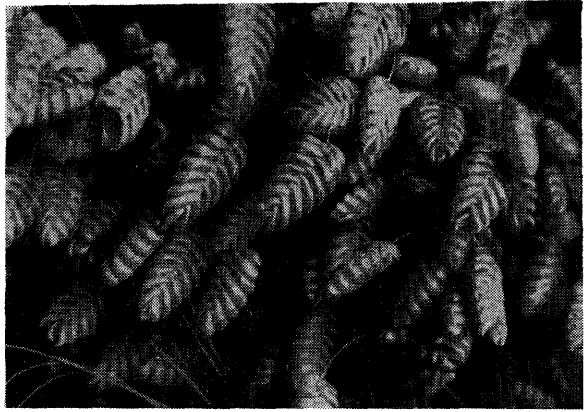
春になってはじめる仕事ももちろんやってよいのですが、それ以上に秋からも大いに準備しておいて春に備えたいものです。

秋からといえばチューリップや水仙などはだれでも植えます。それは植えつけが簡単で、植えこんでさえおけば、まず花は世話なく咲いてくれるからです。秋まき草花類には霜よけと移植という手間をかけることを惜しまず、冬の間中春をまつこともずい分嬉しくたのしいことであることを経験したいものです。

〓子どもの喜ぶ花〓きれいな花なら何でも子どもはよろこびます。眺めてよろこぶだけでなく、手をふれてもつとたのしい花はないかと考えてみて下さい。

## 秋まき草花

コバンソウ〓雑草のように丈夫で、九月末にたねをばらまいておけば、冬は麦のように霜よけもいらすに五月にはコバンのよう



な実を垂れ下げて  
ドライフラワーと  
しておもしろいも  
のです。ドライフ  
ラワーとするに  
は、花穂を幾分若  
刈りとして、束ね  
て逆さにつり下げ  
ておけばよろし  
い。雨の日や冬に  
はこれさえあれば  
花かごをつくった  
りたのしいこと  
です。

キンギョソウは一回たねで育てると二、三年は  
宿根草のように残っていて春と秋の二回に花が咲きます。花が咲  
いたら花の一つをつみとって花筒を指でかるく押さえるとバクリ  
と口をあけます。金魚は口をバクバクあけるのでこれは金魚草な  
どと説明すると子どもたちには印象強く名前も覚えられ、親しみ  
が深くなります。花は次々に咲くので花をつみとって少しも苦  
になりません。

キンギョソウの実が成ったら、熟したころにその一つをとって

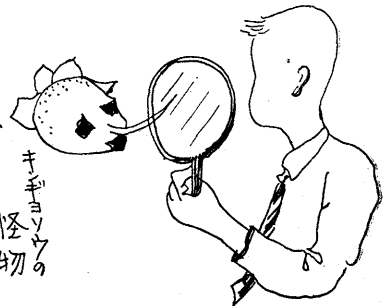
口を閉じたキンギョソウ

筒を押したとき



果実

キンギョソウの  
怪物



ルーペでのぞかせます。目と口と鼻がある、奇怪な顔をした怪物  
がどんなに子どもの目に映ることでしょうか。

キンギョソウのたねは細かいので、いきなり花壇にまかず、箱  
や鉢にたねをまいておきそれが育ったら植えかえて間隔をひろげ  
て植えなおし、冬はかんたんな霜よけをしておくとうろしい。種  
子の発芽は二五度C以上ではすこぶる成績が悪いので九月末涼し  
くなってからまくのがよろしい。

春まき草花

オジギソウは動きますから愉快です。さわった葉が  
コックリとおじぎをするので子どもたちは家来ができたとおよろ  
こび。五分もたてばもと通りに葉が開きます。花もかわい球状  
でピンク。小鉢に植えておいたものをおみやげに持ち帰らせるの



もたのしいこと。

センニチコウとムギワラギクとにかくまいておいて下さい。

夏には花が咲き、それが立派なドライフラワーになります。今日は千日紅のペンダント、明日はムギワラギクの髪かざり、男の子には帽子のアクセサリーや胸のくんしょうにこの乾燥花を利用するのがよいでしょう。

オシロイバナとジュズダマどちらも丈夫で路傍の雑草的な性質ですから、どこかにばらまきしておきます。

オシロイバナは種子の中に胚孔があり、白い澱粉をふくんでいるので女の子にはオシヤレの材料として水でねって鼻や頬ぺたを白くぬるのがおもしろがられます。黒いたねを糸を通してネックレスをつくることは昔からだれでもやっています。

ジュズダマもネックレスの良い材料です。

両種とも一度植えておけば毎年こぼれだねが次年に芽を出し絶えることがあります。

マツバボタンは夏の炎天に咲く美しい花ですが、夏の休み前にその一枝を切りとり、一日干してからコップの水にさし立てておくと間もなく白い根が出てきます。これを花壇や鉢に植えれば一人前の株になるので子ども心にも植物の生命の尊さがわかるように思えます。ふつうのマツバボタンは八重と一重で九月に咲き止みますが、ジュエルは十月一ぱいを咲きとおす大輪ですから、この方がたのしみです。ジュエルは耐寒性もつよく、庭の日溜り

に植えておくと根株が越冬して次年は立派な大株になります。

ヒヤクニチソウはオレンジ色や黄色のヒヤクニチソウは、満開をすぎたころその花びらをとって、台紙に写真のりで八枚はりつけて菊花模様とし、その上から再びのりをぬりつけて乾かしますと、いつまで経っても色と形が変わりません。ランドセルやカバンに貼りつけてもおもしろいものです。

写真のりの中に花びらを閉じこめたことになり、空気にふれないので変色もしません。赤や紫ピンクなどは色素の性質上半年もたつとすっかり変色してしまいます。

アサガオは大きな大輪アサガオのたねをまいても百分の発芽をしない。あれは悪い古だねが入っているのだろうという人がいます。アサガオのたねは、ふつうにしまっておいても三年間は発芽能力をもっています。

芽の出ないたねがあるのは、硬種子かたねといって皮がかたく水を吸わないものがあるからです。一晩水につけてふくらんだたねはすぐにまき、ふくらまないでもとのままのたねは、種孔たねあな(発根部)をきいて、皮の一部をハサミで切るか、やすりやコンクリートにすりつけて表皮を一部削ってからまけばほとんど発芽します。

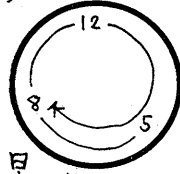
早く咲かせるには、双葉ふたば(子葉)がひらいたら、夕方五時には、りんご箱やダンボールの紙箱をかぶせます。夜はそのまま暗くしておき、朝は八時に覆いをとり外します。つまり一日に十五時間は暗闇とし、九時間だけ日光にあたるようにしてやるように

してやるのですが、これを三十五日つづけると、本葉が三枚出てそれに花が咲きます。

草丈がわずか十センチメートルのチビのアサガオに大きな直径十センチメートルの花が咲いて見事です。

苗は二、三本鉢にまいたままで育ててやります。たねまきの時期は五月上旬から。暗くするためにかぶせる箱は光のもしないように目ばりしておくとうよろしい。雨の日はこの短日にする仕事を止めてもかまいませんが、途中でやめてはいけません。ふつうに育てると子葉が出てから七十日もかかってようやく花が咲くもの

アサガオのチビづくり

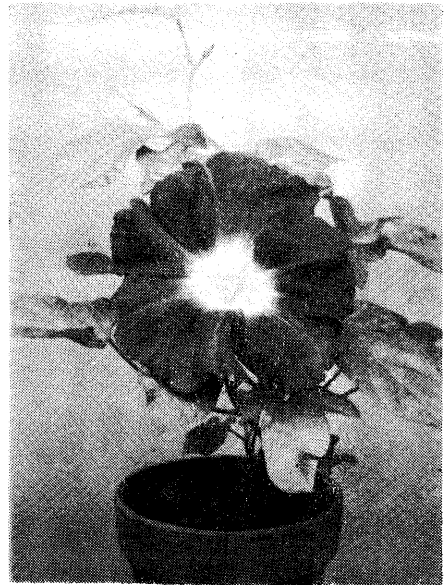


夕方五時から  
朝八時まで  
くらやみ

朝八時から  
夕方五時まで  
日まに  
あてる

× 35日  
花が咲く

あさがおのチビ作り



です。しかも、つるをそのままのばしたとあればつるは二階の屋根までとどいてしまいます。

たねまきはおそくとも五月一ぱいに終えるようになります。それよりおけると夏の休みにかかって鉢を自宅にもちかえられないとこのチビ作りができません。

アサガオはのびたから咲くというのではなく、日が短く、夜が長くなると花芽ができてそれが開くようになるものなのです。

コスモス|| コスモスにはいろいろ種類があって、ふつうに秋に咲く種類はよほど日が短くならないと花が咲きませんが、アーリーセンセーションは六十日ほどたてば花が咲きます。咲かせたい日、つまり何かの記念の日などから、さかのぼること六十日前に

たねをまけばいいのです。

コスモスの中に黄花コスモスという一重、八重の種類があります。この花が咲いたとき花びらにタバコの煙を近づけてみると、黄色がみているうちに紅いほどのオレンジ色に変化します。オヤオヤといっているうちに全く美しい色に変わるのですから子どもたちには驚異の現象です。

タバコの煙のニコチンガスがアルカリ性であるから色素がアルカリ反応をおこしたのです。

これと同様に青い色のアサガオにタバコの煙を近づけるとますます青藍色になり、赤い花は紫に変わります。紅い花に酢をキリフキでふきかけるとますます紅くなり、青い花にかければ紫青色に変わります。

酸とアルカリの花色に及ぼす変化は、小さな子には訳はわからなくても厳然とした事実はいくつの年になっても覚えこんでいることと思います。

ヒマワリ||ロシヤヒマワリは二メートル、もっと高くなって咲くジャイアント、一粒のたねが、またたくうちに子どももの背丈をこえてのびるのでから丈くらべも追いつきません。

花が咲いたあと、大きな円盤が下を向いて子どもたちを見下すように熟してくると、やがてその種子は焙ってポツポツとたべるのでたのしみです。油も相当にあり栄養価も高いものです。

倒れぬように三方から竹の支柱をしておく必要があります。

ナタマメ||大きなマメ。ピンクと白があり、ピンクの豆はピンクの花、白いたねは白い花が咲きます。これまたのびるのが早く、実がなると大きなナタのようです。ジャックと豆の木の話をしときかせるには、ナタマメを育てておいて見せるとよいでしょう。

### 子どもの見る花壇の花

もうせんのようにしきつめた花壇の花、きれいだなど大人も子どもも思います。しかし、大人は果たして子どもと同じ感懐をもつて見ることができるとでしょうか。

チューリップの単純な線、パンジーのニコニコした顔、それらの花をみる子どもの心はおどぎ話の国に在ることを想像してみて下さい。

かりに逆の立場から考えてみれば、デージー、パンジーのもうせん花壇をつくったとしても大人が立って花を見る角度と小さい子どもが見る角度はちがいます。ひろい花壇をみると、大人は子どもより大きな角度でみますから、大人はきれいだなど思っても子どもは小さな角度からみて、さほどにきれいとは思わないことでしょう。高いところからその花壇を見れば別問題ですが。

一方、一本のチューリップが咲いたとき、同じ位置に立って見る大人の目の角度と、子どもの低く見ている子どもの目の角度は



ちがいます。子どもはチューリップを正面からワイドで見ているも、大人は浅い角度で見られません。大人には興味がなくとも子どもには不思議の国のアリスのように、大人にはきこえない草花たちが話しているカン高い声さえもきこえるのにちがいがありません。

三角と四角の同じ花壇をつくるにも、材料費は最少限に使うことを大人は考えます。大人も子どもも錯覚があるのは当然ですが、子どもの錯覚は大人よりはげしいものです。

いま同じ面積の花壇が、三角と四角でできているとしたら三角形の花壇の方が大きく見えるものです。少ない草花材料を生かしてつくりたいとき、三角形の花壇をつくるべきです。これは労少なく効を大ならしめる方法です。

花壇は花ばかりを植えこむものとは限りません。砂も砂利も小

石を利用した花壇

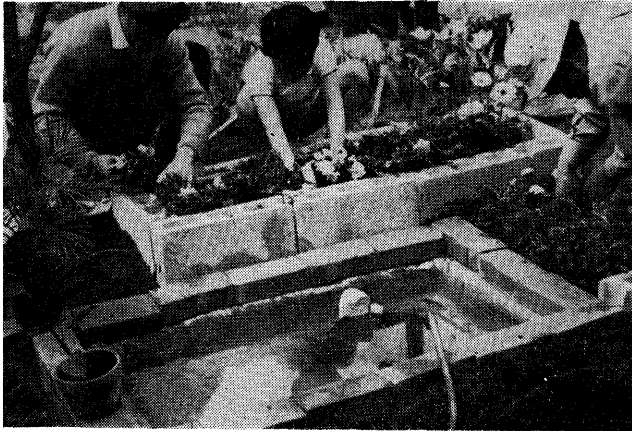


子どもは水が好き

石もつかってデザインするのもいいことです。円い扁平な石を使って夏はその表を白ペンキで塗って並べ、冬はその裏面にオレンジ色のペンキを塗って冬花壇のハボタンなど一しょに模様を描いてみたらおもしろいでしょう。

庭には山あり池ありというのが、昔からの造園の手法にあらわれています。水がなくても枯山水の庭がよくつくられています。子どもは系統学や発生学の立場からみて大人よりは原始人に近い感覚をもっています。

ビニール池で水草をたのしもう



夏になれば水がほしくなるのは当然のこと。かんたんなビニール池などをつくって、水草を浮かべる庭の部分、即ち、解釈の方法をかえれば水面のある花壇をつくるのもおもしろいことです。ビニール池||子どもたちと一しょにビニール池はぜひつくりたいものです。またたくうちにでき、夏がすぎれば再びそこに花を植えたり、まいたりできるようにしておくことがおもしろい方法です。

ビニール池の深さは二〇―三〇センチあれば十分です。土を長方形に掘ったらビニールを平らにして周囲を立てて、煉瓦やブロックで土のくずれぬようにおさえます。水を入れれば即席プールというわけですが、収容する水草類

は次のものがいでしょう。

ホテイソウ||水がつめたたく、肥料がないときはふくれて浮かびますが、鉢に粘質土で植えてプールの浅瀬に沈めておくと夏には花が立派に咲きます。紫色の花は一日花で、咲いた次の日には水中に没します。日光には極力あてるようにし、水温もなるべく高くしてやって下さい。

ウォーター・レタス||和名をボタンウキサといい、ボタンの花のようにまたはレタスのように葉が重なり広がって水に浮かんでいる風情がおもしろく、一定の時期には、やたらに子をふきまします。花はめったに咲かず、かりに咲いてもひどくつまらぬものです。水上に浮く植物では形のおもしろいものです。

ウォーター・ポッピー||初夏の頃から水に入れてやると水面を這ってひろがり、夏の終りには黄色いケシのような三枚弁の花をひろげます。毎日数輪咲いてたのしいことです。これも水草、御多分にもれず十分日光にあてることが大切です。

ヒメスイレン||とても大きなスイレンはむりですからヒメスイレンの根茎を鉢植えとしておき鉢を水底に沈めておきます。

其の他の水草類||田圃から採集したクワイ、オモダカ、ナギ、ヒルムシロなど、小さな池は子どもたちのよい水あそびの場所となります。とくに都会の子どもたちは水のある花壇にはめぐまれることが少ないので少なくともビニール池の一つぐらいはつくって一夏をたのしく過ごさせてやりたいものです。(千葉大学)

日本幼稚園  
協会主催

# 幼児教育講習会

本年も、例年にならって、次のように計画いたしました。どうぞ、おおぜいの皆様がおいで下さいますようお願いいたします。

お茶の水女子大学附属幼稚園内

## 日本幼稚園協会

### 第一部 午前の部 九、〇〇—一二、〇〇

期 日 昭和四十二年七月二十二日(土) — 二十五日(火)

会 場 お茶の水女子大学講堂

講 師 我が国教育史の中の幼児教育

幼児の発達に関する今日的諸問題

幼児の造形指導のポイントは何か

「遊び」について

東京大学名誉教授  
日本教育学会会長

海 後 宗 臣 氏

お茶の水女子大学教授

平 井 信 義 氏

十文字学園短期大学教授

林 健 造 氏

お茶の水女子大学講師

坂 元 彦 太 郎 氏

同 附属幼稚園園長

### 第二部 午後の部 一、〇〇—四、〇〇

期 日 昭和四十二年七月二十二日(土)―二十五日(火)  
 会 場 お茶の水女子大学講堂

講 師 幼児の創造性を培うあそび

日本女子体育大学教授  
 お茶の水女子大学名誉教授

戸 倉 ハ ル 氏

申込所 お茶の水女子大学附属幼稚園講習会係り(東京都文京区大塚二―一―一)

申込期限 七月十五日まで(はがきに希望の部を明記してお申込み下さい)

会 費 第一部受講料四〇〇円、第二部受講料四〇〇円

宿 泊 ご希望の方は七月十五日までにお申込み下さい。二食つき約一、三〇〇円(サービス料を含む)ぐらいでお世

話いたします。

○新刊 「お茶の水大附属幼稚園の生活―目で見る教育課程」(創立九十周年記念として出版しました。本園における幼

児の活動の写真集)本会会員に限り千円でお頒ちする予定。

(注意)

○会費は当日お払込み下さい。なお、第二部受講の方は別にテキスト(代未定)をおもとめ下さい。

○第二部受講の方は、運動に便利な服装でおいで下さい。なお、本講習会の曲目についてのレコードを、会場でおもとめになれるように取りはからいます。

【日 程 表】

日	時間	七・二二(土)	七・二三(日)	七・二四(月)	七・二五(火)
	9.00	平井講師	海後講師	坂元講師	林講師
	10.00	同上	同上	同上	同上
	11.00	同上	同上	同上	同上
	12.00				
	1.00	戸倉講師	戸倉講師	戸倉講師	戸倉講師
	2.00	同上	同上	同上	同上
	3.00	同上	同上	同上	同上
	4.00	同上	同上	同上	同上

# 「基本的な生活態度の形成をめざす指導」の研究 (四)

## || 実践の考察から得た指導の観点 ||



仏性とよ子・服部 馨

稲岡 百合・谷川 敬

### (四) 抵抗の克服

先に述べた自己発見、自己創造が、安易な妥協や単なる順応におちついてはならないことはもちろんである。困難な状況に際して、自らそれを克服しようとする強い意志的エネルギーこそ大切なのである。このためには、子どもにも抵抗に立ち向かわせるといふ積極的な方法が求められることになる。事例の中では、この場面が極めて少なかったが、例えば「(ままごと)をしよう」とA、B児が衝立をたてている場面) A えらいな。B 重たいな。A できひんし先生にいいおうか。B あんたいいや。A 先生できひんわ。T ああ、きばってしているのね、もうちょっと頑張ってみたら? みてあげるからね。(二児やっとなてる) T やっとなできてよかったね、遊びがすんだら、また二人でもどせるわね」のような場合、

このときの子どもが、教師の意図による抵抗の条件を更に克服しようという姿勢に意欲を示している。

つまり、現在より更に高度な生活態度に向かって前進しようとする姿勢が顕著に示されているのである。これは働きかけのようには、示唆、暗示、助言といったものではない。むしろ一見子どもには不利ときえ思え、嫌悪感さえ抱かせるような条件を与え、子どもをそのような条件でさえも、積極的に、意欲的にそれに立ち向かわせることである。もちろんこれは教師対子ども、子ども対子どもとの安定した人間関係において、お互いに成功しようと激励し、賞賛しあう雰囲気なかでこそなされるものである。この子どもが無事に抵抗を克服した場合、子どもはその成功を喜び、自信をもって次の不利な条件にも立ち向かう姿勢を示すことである。この意味において、抵抗を与え、それを克服させることは子



どもに自信を得させ、より高い生活態度に向かわせる大切な条件であると考えられた。

しかしただこの抵抗は不断に与えられるものではなく、働きかけによる自己発見の経験をくり返している間に、時折り自然な形でそれに出くわさせることが大事であろう。いわばどうしてもそれをやりとげなければならぬという必要感が子どものうちにあることが重要なのである。そうであつてこそ子どもたちはそれを力強く乗り切ろう、克服してみようとする姿勢になることができるのであろう。もちろん抵抗の克服は、今まで述べてきたような受容や理解によってかもし出されたラポール（心のつながり）の感情がなかったならば、それが一種の恐怖感を起こすであろうことは、いうまでもない。愛情、包容の中でこそ抵抗は克服されるのである。また克服したあとでの満足感を大切にしてやりたいし、そのための激励や賞賛のあり方をも考えるべきであらう。

事例(一)

子ども	教師	教師の気持ち
(キキ)とぞしととA、B児が衝立をたてている。 Aえらいな。		頑張っていやなこ

A 重たいな。 B できひんし、先生にいおうか。 B あんたいいや。 A 先生できひんわ。	ああ、きばつてしてるのね。もうちょっと頑張つてみたら。みてあげるからね。どうしてもできなかつたら手伝つてあげるからね。	と、えらいことでものりこえさせたいと心の中で励ましていた。
A よいしょ（教師の顔を見ながら動かし） B 押すで。 A ええわ。	やっどできてよかつたね。	はげましてやろう、どうしてもだめだったら手をかそうと思った。
A、B（うなづく）		教師をあてにしないでやりだしたことうれしかった。 こんなえらいことだと思わず、いやなことにもたちむかつていこうとさせた。

(考察)

子どもたちは、最初は自分たちでするつもりであった。  
教師が偶然部屋にはいったので急に甘える気持ちになつたよう

である。

・折角はじめは自分たちでするつもりでいたので最後まで努力させてみよう、強いて手伝わなかった。

・衝立をたてるのに大分苦勞をしたので、あとかたづけができないかもしれないと思い、最後の言葉であと始末の念を押しした。

・最初ちょっと無理かと思つたが、二人が仲のよい友だちであつたので協力が十分しあえるだろうと思ひ、手伝わなかつた。

・二人が重たい衝立を押ししているときの表情は、決して暗い表情ではなく、私たちでもやってみせるといったファイトを感じさせられた。

・教師は手こそ貸さなかつたが、気持ちの上では真剣に援助し、暖かく見守つてやつたのである。

・二人で衝立がたてられたとき、二人が頑張つてよかつたという表情をしていたように思ふ、それが辛いことを乗りこえたあとの満足感ともよみとれて、無理でもさせてよかつたと思つた。

とにかく無理をさせることが子どもに抵抗を感じさせるからと、抵抗を排除することが強調されがちである。しかし、子どもにそのとき安定感が十分認められ、積極的、意欲的態度で生活に立ち向かっているときに、自然な形で抵抗に直面した場合、排除してやるよりもむしろ強いて立ち向かわせること

によつてそれを克服させ、自信を得させた方がより高度な生活に向かおうとする意欲を起こさせるのではないだろうか。

事例(二)

子ども	教師	教師の気持ち
<p>A お当番さん机を出しや。</p> <p>当番(だまつている)</p> <p>A 出しようか。</p> <p>B 自分でしや。</p> <p>A 手伝うてもよいやんか。</p> <p>C かわいそうやんか。</p> <p>当番(だまつて立っている)</p>	<p>お当番さん、お友だちが手伝つてあげるいつてるけれど、お当番さん二人で机直せるね。</p> <p>Aちゃんがよいこと</p>	<p>よく気がついていつてくれたと思う。</p> <p>当番をさつとすればよいのに。</p> <p>Aはやさしい気持ちをもっているなど思つた。</p> <p>友だちのことをいろいろ考えられるようになったのだと思ひうれしかった。</p> <p>お当番さん自身にやらせたかつた。</p>

いつてくれたから、  
お当番さんがきばっ  
てできたのね。

A (嬉しそうな顔を  
する)

(考察)

- ・この日の当番は何時も早く行動ができないので、どんなことがあっても最後までやらせるつもりであった。
- ・またこの当番二人は誰とも友だち関係ができないので、こんなことを機会に二人の関係でも持たせようとした。
- ・しかし教師のそのような思いとは別に、A、B、C三人が当番の二人の子どもに暖かい思いやりの気持ちを言葉で現わしていたことが教師を刺激した。
- ・つまりこの時の教師は、当番二人にさせることに気をとられて、周囲の子どもの動きを忘れていた。
- ・当番二人がやっと動き出してくれて教師はやれやれと思ったが、この二人が動けたのは、A、B、C三人の暖かい気持ちを通じてそのことで二人が動けたのだろうかと教師は思えた。
- ・そのことから教師の言葉として自然に、Aちゃん云々がいえたとし、その後まですとA、B、C三人の子どもの暖かい思いやりの気持ちが教師の印象に強く残った。

何時も自信の持てない二人の当番が困っていることを教師は知っていたが、強いて知らないふりをしてあくまでもやらせてみようとした。一見、反受容的とも思えるこの教師の姿勢に、二人の当番はやむを得ず立ち向かわされたのであるが、このときの不満な感情は後で成功感となって子どもに喜びを感じさせている。生活に立ち向かっていこうとする自信や意欲もこのような抵抗の条件に時折出くわすことによってそれを乗り越えたととき、一層高まりを示すのではないかと思う。

事例(三)

子ども	教師	教師の気持ち
(教師の手をしっかりと握って離さない)	先生、手を洗いたいたい洗うわね。	離れないので、少々しんきくきく思っていた。この子と手をはなしたい。
(だまっている)	まゆみちゃんも洗ってごらん、先生の手こんなにきれいな	何も知らないから、手を洗うことぐらいさせてみよう。手を洗うことぐら
(無表情で、だまっている)	だまっ	いできないのかと思

った。

(考察)

- ・教師が洗いたいといったのは本心ではなく、始終手を握って離さないM児の手を離したかったのである。
- ・M児自身は手を洗いたがっていたのでは決してなく、それよりも教師にしっかりと手を握っていてほしかったのである。
- ・教師はM児が何時もしようとしないので、せめて手を洗う行為でもさせてみようとしたが、M児にとっては手を洗うこと以前に、教師の手を離すことさえできなかったようである。
- ・教師は最初M児に、手を洗わせるための働きかけ、をしたつもりであったが、これはM児にとっては大変な抵抗であったようである。抵抗を与えるにはM児は教師の手を一瞬も離したくないほど不安定な状態で、与えられた抵抗を乗りこえる気力などみじんも持っていなかったのである。
- ・教師はM児の手を離したい気持ちと同時に、M児に手洗いの経験をもさせたかったのであるが、不安定なM児に何をさせようとしても受けつけないことを思い知らされた。

教師は最初働きかけるつもりでM児に接し話しかけたのであったが、これは決して働きかけたのではなく、まさしくM児

に抵抗を与えたのである。しかし極度に不安定な状態のM児が抵抗を克服するはずがなく、一層M児を不安定にしてしまった。抵抗は十分安定した状態の子どもに時折自然な形で与えるべきで、決して無暗に常に与えるものではないということを認識した。

事例四

子ども	教師	教師の気持ち
A、B先生、かぶせて(水泳帽をもってくる)	自分でできないの。	こんなことがどうしてできないのだろう。
A、B前か後かわからへんの。	かぶってみたの。	しないでいってやるなど思った。
A、Bううん。	かぶってみてごらん、AちゃんとBちゃんが見せあいっこしてね。	自分たちでお互いのあいだでやらせた
Bできひんわ。	鏡をみたらどう?	い。
C先生見ててな。	先生は鏡と違うの	まだ教師をたよっ

<p>A、B先生、鏡と違 うのやて、おもしろ なー(走って鏡の方 へ行く)</p> <p>A、B紐くくって</p> <p>Bよう結べへん。</p>	<p>よ。</p> <p>二人で結びあいっこ しようね。</p>	<p>ていると思えた。</p> <p>わからないことを いう子どもだと思 えた。</p> <p>最後までやらせた い。</p> <p>Aは結んでもらっ てBのを結べない。 しようと努力しな い。の だろうか。</p>
---	--------------------------------------	--

(考察)

- ・教師の感情が強く働いている時、鏡とちがうのやておもしろいなー。といった子どものあまりにも純真な気持ちに教師自身考え込んでしまった。
- ・このケースでは、この子どもが自分で帽子がかぶれたらそれでよいのではなく、例えばかぶれなくても、一生懸命かぶろうとする姿勢があればそれでよいのであった。
- ・かぶろうとする子どもの姿勢は、かぶらせたい教師の気持ちをぐいぐい押しつけることではなく、教師と子どもが素直な気持ちで結び合えることによって、自分もかぶせてみよう、という

気持ちを起こすのではないかと思った。

- ・このことは最初の教師の言葉である、自分でできないの、が非常に攻撃的であったことから強く反省した。

- ・最後、よう結べへんといったことから子どもは最後まで自分で結んでみようとはしなかったのである。

- ・また問題は、みあいっこしてごらんといった時、教師は最後まで見届けようとする監視の役目で見守っていたことである。

- ・鏡をみたらどう、といったのは、教師自身が監視的な気分が付いたので、これでは子どもが窮屈だろうと思ひ、その意味で鏡をみたらええ、といったのである。

- ・最初から攻撃的であった教師としては当然の事態で、この時監視の意味で見るのでなかったら結果は変わったかもしれない。

- ・つまり、かぶれないで困っている子どもの気持ちを素直に汲取ってやろうとする教師の姿勢であれば、先生みてあげるから一生懸命かぶってみようね、といえたであろうし、子どもは暖かい教師の心に触れながら最後まで努力してかぶろうとしたかもしれない。

この事例では、教師の意図がどのようなものであっても、それを一方的に押しつけた場合、子どもは素直に受け入れようとはしない。反対に最初の教師の態度が攻撃的でなく受容的

であったなら、自分でかぶらせてみようとする教師の働きかけは、これは押しつけでなく、むしろ子どもへの良き抵抗となつて、一層自分でやってみようとする意欲を高めたかもしれない。

以上の四項から総合して考えさせられたのは、教師自身の態度についてであった。

子どもの態度変容については、生活態度形成のプロセスにおいて、当然期待されるべきことであるが、子どもの態度変容を期待する教師の姿勢は、とりもなおさず教師の態度変容といえるのはなからうか。教師自らが子どもたちの態度形成の教育の条件に、少しでも近づこうと努力する、この前向きな姿勢は、すなわち教育の条件の基盤ともなるべき理解と受容に努力する教師の姿勢であり、これは明らかに教師の態度変容の第一歩である。そしてこの教師の態度変容の第一歩こそが子どもの態度変容の第一歩を意義づけるのであろう。とすると、教師の態度変容の第一歩が期待できない時には、子どもの態度変容は期待できないことになる。事実、子どもをよく理解し、受容することのできない教師は、子どもの態度を望ましいものに変容させることができないということは、事例の多くで実証されたのである。

教師と子どもとのこのような態度変容の関係は、その表面的な

変容を意味するのではなく、むしろ内面生活の変容を意味するものであることを知らなければならぬ。教師が子どもの内面生活を洞察し、子どもの気持ちをもとに受容するときには、子どもは教師の暖かい心情に触れ、その生活態度を更に望ましいものに向かつて変容させずにはおられないであろう教師の態度変容が、その心情を暖かいものにし、教師の暖かい心情に触れた子どもは、その生活態度をより望ましいものに変容させる。このような心情と心情との触れあう教師と子どもとの人間関係、これこそ人間形成、態度形成の過程になくてはならない大切な要素であると思ふ。

このように述べてくると、生活態度形成のプロセスにみられる子どもの態度変容は、実に教師の態度がどのように変容していくかにかかっていると見えるのではないか。口先だけ、言葉だけで形式や順序を教え知らせることが態度形成でもなければ生活指導でもない。教師が子どもに教える以前に自らの態度をまず変容させることである。指導方法や指導技術の研究、あるいは教材研究も大切である。しかし、それがどんなに立派な研究であっても、実践の場で子どもに接する教師の態度が子どもに先ず受け入れられるべきであり、子どもに受け入れられるべく努力する教師の態度こそ、子どもの態度を望ましいものに変容させる大切な要素であることを知ったのである。

(天津市立大津幼稚園)

# 幼児前期の保育活動(三)

岡本明子  
金井淑

## 社会性

### 1 目的及び方法

二歳児をある期間、同年齢のグループに参加させた場合、社会性がどのように発達していくかを、グループ行動の変化、子ども同士の対人関係の変化の二点から考察しました。ここではその結果を実例を示しながら述べてみたいと思います。

被験児は、「幼児前期の保育活動(一)」で述べた実験群五名、統制群四名の幼児で、いずれも以前に集団に参加した経験はありません。

### 2 結果と考察

#### ①グループ行動の変化



③ 傍観 本実験中にみられたグループ行動を分類してみると次の七つになります。

④ 傍観 自分では何もせず、他の子の活動を見ている。

⑤ 独り遊び

⑥ 他の子に対する

⑦ 関心がな

⑧ く、一人一人

⑨ 違う遊び

⑩ を楽しむ。

⑪ 例、3回

⑫ (写真①)

写真 ①



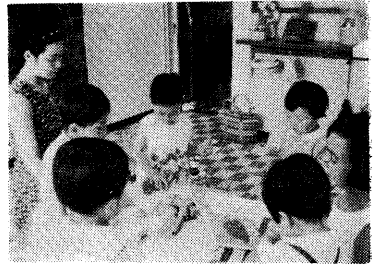
写真 ②



① 大人を通しての交渉 何人かの子どもが同じ場にいても、子ども同士直接に話しかけたり、働きかけることはなく、実験者を通して交渉が行なわれ

E子、棚にあった麦わら帽子を数個重ねてかぶり、「帽子屋さん」といいながら部屋の中を歩きまわる。  
 A夫、汽車積木で遊んでいて、E子がそばを通っても何の反応も示さない。  
 C夫、床にしゃがんでブロック積木で遊んでいて、他の子には全然関心を示さない。  
 B夫 各々違う場所にじっとして何もせず他の子の行動を傍観D子} している。  
 ◎ 並行遊び 何人かの子どもが同じ場所に集まり、同じ遊びをしているが、子ども同士の交渉は行なわれない。  
 例、9回 (写真②)  
 おやつの後で、A夫、C夫、D子、E子が順々にブロック積木の所に集まり遊び始めるが、各自黙って勝手な物を作る。

写真 ③



る。  
 例、10回 (写真③)  
 被験児全員が実験者Bのまわりに集まって絵本を読んでもらう。  
 A夫、本の数字を見つけて、「し、さん、に、いち」と読む。  
 E子、「Eちゃんはこれだけ」と実験者Bに指で年齢を示す。  
 実験者B、D子に「Eちゃんはこれだけですって」と指で示しながら話す。  
 D子、「あたしもこれだけ」と同じように指で年齢を示す。  
 ◎ 対子どもの一方的な働きかけ 他の子に関心を示し、働きかけるが、働きかけられた方がそれに何の反応も示さない。  
 例、3回  
 E子、実験者Aと前後につながり、レコードに合わせて汽車になつて走る。  
 壁際にじっと立っている子の前で止まり、「一緒にしましょ」ときそう。



D子、何も答えないでじっと立ち続ける。

⑦ 子どもからの働きかけに応ずる。 他の子に働きかけられると、それには応ずるが、それが相互交渉には発展せず、そのまま終わってしまう。

例、8回

部屋の隅の机で粘土遊びをしている。

A夫 自分の作ったものを「果実くだもの」とか、「ホットケーキもどE子」うぞ」などいいながらB夫に手渡す。

B夫、黙って受けとるが、それをかかえてじっとしている。

⑧ 子ども同士の相互交渉、子どもだけで相互交渉ができ、役割遊びができる。

例、15回 (写真④)

A夫、汽車のまわりに積木を並べて遊んでいる。

E子、A夫の横に買物かごを持って来て、布ボールをかごに入

れはじめる。

A夫、E子の様子を

見て、ビニールの

手さげに並べてあ

った積木を入れは

じめる。

実験者A、E子に「お買物してるの?」

E子、「一緒に」

実験者A、「Aちゃんと一緒に?」

E子、「はい、おとうさんと一緒に」と布ボールをかごに入れ

ながら実験者と話す。

「これシャーベット」といいながらあふれそうに布ボールを入れて、「重くないわ」という。

A夫、汽車のところで「動くじよ」という。

E子、汽車のところに行き、「これ連れてってね、Aちゃん」

と布ボールを乗せて頼む。

A夫、「こんなに重くなっちゃうね」

E子、それにはかまわず、「おとうさん、車ある? ごちそうの車」とD夫にきく。

A夫、「はい、ある」

ボールをこぼしながら汽車を引っ張る。

E子に向かって「車、ここに乘ってちょうだい。うしろ」と

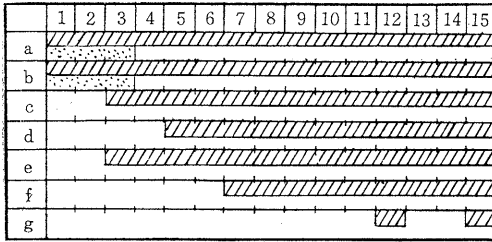
うしろの座席を指さす。

E子、布ボールをたくさん入れた買物かごをさげ、乳母車に人形を二つ入れて押してくるが、途中でボールをこぼしてしまい、「落っこっちゃった」と嬉しそうに笑う。

#### 写真 ④



図1 グループ行動



実験群にその行動のみられたことを示す。  
 統制群にその行動のみられたことを示す。

的にみても、図1の行動を追って総合的にみても、図1の

遊びが盛んになると共に、その占める割合は減ってきます。なお、統制群においては、表1で示されたように、子どもたち

以上で、本実験にみられたグループ行動を追って総合的にみても、図1の

遊びが盛んになると共に、その占める割合は減ってきます。なお、統制群においては、表1で示されたように、子どもたち

たりして遊ぶ。以上で、本実験にみられたグループ行動を追って総合的にみても、図1の

遊びが盛んになると共に、その占める割合は減ってきます。なお、統制群においては、表1で示されたように、子どもたち

A夫、しばらく一人

・D子 前半は独り遊びもみられず、傍観のみであった。後半は独り遊びを十分に楽しみ、10回頃から実験者を通しての交渉ができるようになる。

でヨーグルトを飲む

・C夫 傍観は3回以後みられないが、他の子に働きかけた

ボール遊びに移っていく。

・B夫 最終回まで祖母や母から離れられず、遊びにも積極的でなく、傍観が多いが回を追って減ってくる。直接に他の子に働きかけることも少なく、大人を通しての交渉が多くなる。

ボールを渡す。

・A夫、E子 傍観は一度も見られず、3回から他の子への働きかけがみられ、終りの4回では二人で役割を決めて遊べるようになる。

B夫がボールを持つ

・B夫 最終回まで祖母や母から離れられず、遊びにも積極的でなく、傍観が多いが回を追って減ってくる。直接に他の子に働きかけることも少なく、大人を通しての交渉が多くなる。

ボール遊びに移っていく。

・C夫 傍観は3回以後みられないが、他の子に働きかけた

E子、A夫の真似をして「ヨーグルトよ、はい」とD子に布ボールを渡す。

・A夫、E子 傍観は一度も見られず、3回から他の子への働きかけがみられ、終りの4回では二人で役割を決めて遊べるようになる。

黒板の前にいたD子に「あげましょ、ヨーグルト」と積木を手渡す。

・A夫、E子 傍観は一度も見られず、3回から他の子への働きかけがみられ、終りの4回では二人で役割を決めて遊べるようになる。

E子と一緒に乳母車を押して黒板の前まで行く。

・A夫、E子 傍観は一度も見られず、3回から他の子への働きかけがみられ、終りの4回では二人で役割を決めて遊べるようになる。

とお母さんこぼしちゃったの？」ときき、E子に手伝ってボールを拾う。

・A夫、E子 傍観は一度も見られず、3回から他の子への働きかけがみられ、終りの4回では二人で役割を決めて遊べるようになる。

A夫、その様子を見て、キャッキョとはしゃいで、「どうしてお母さんこぼしちゃったの？」ときき、E子に手伝ってボールを拾う。

・A夫、E子 傍観は一度も見られず、3回から他の子への働きかけがみられ、終りの4回では二人で役割を決めて遊べるようになる。

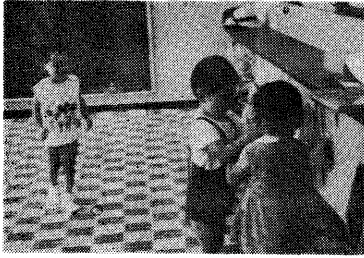
E子と一緒に乳母車を押して黒板の前まで行く。

・A夫、E子 傍観は一度も見られず、3回から他の子への働きかけがみられ、終りの4回では二人で役割を決めて遊べるようになる。

ようになります。

グループ行動においても、粘土や音楽活動の場合と同じように個人差が大きいので、次に実験群の被験児について個人別に述べてみます。尚、A夫とE子は行動の現われ方がほとんど同じなので一緒に述べます。

写真 ⑤



の間に集団意識はみられず、他の子へ働きかける子どももありませんでした。実験群の初めの3回においても、他の子への働きかけがわずかしかみられなかったことから、二歳児が、集団意識をもって、他の子に働きかけたり、一緒に遊ぶことを楽しむようになるには、ある期間が必要なことがわかります。

②対人関係

本実験における実験群の被験児の対人関係(他の子に対する関心)は、初めの2回にはほとんどみられなかったが、3回以後は徐々に他の子へ関心を示し、最終の15回までにはいくつか変化がありました。次に実験にみられた対人関係を挙げてみます。

〔A夫↓C夫〕

この二人は、よく玩具の取り合いをし、C夫はすぐに「キー」と金切声をあげる。それでA夫はC夫を避けて遊ぶ。

〔A夫↓D子〕

・3〜4回 動きが鈍く、ほとんど話もせず、働きかけても無反応なD子に対して、いらだたしき

を感じてか、攻撃的な態度をとる。

例 3回 (写真⑤)

A夫、E子と一緒に「ヤッホー」と叫びながら遊んでいる。

D子、部屋の隅で立って他の子のようすをじっと見ている。

A夫、D子の前に行き二、三度「ヤッホー」と叫ぶ。

D子、黙ってじっと立っている。

A夫、両手でD子の顔をギュッとととさんで「Dちゃんヤッホー」と大声で叫ぶ。

D子、いやがる。

・5〜9回 D子に対して関心は持ち続けているが、攻撃が減り、時々名前を呼んだりする。

・10〜15回 すべての活動に消極的で、動きの少ないD子に対して、同情やいたわりの気持ち強く示すようになる。

例 14回

D子、紙細工をしていたが、折紙が割箸にうまくつかず「つかない、つかない」と泣きそうな声を出す。

A夫、D子の横の机で粘土をしていたが、粘土をやめて、D子に近付きやさしく「Dちゃん、Dちゃん」と慰めるように声をかける。

D子、「はい」と小声で答える。

A夫、嬉しそうに「これ持てるかい」とD子に尋ねる。

ていく。

〔B夫↓A夫〕

・1~12回 A夫に対して関心は持っているが、直接ことばや行動で働きかけることはなく、祖母に尋ねたりすることが多い。

・13~15回 A夫に対する関心をはっきり示すようになり、A夫について実験者に尋ねたり、直接話しかけたりする。

例 13回

A夫、粘土をブロック積木に詰めて遊んでいる。

B夫、A夫に「何作ってるの？」と小声で尋ねる。

A夫、「はい? コカ・コーラです」

〔E子↓A夫〕

・1~4回 A夫が玩具や粘土を独占するので、A夫がそばにくると玩具を持って逃げたり、粘土を隠すなど、A夫を避ける。

例 4回

E子、実験者Aとボールの投げっこをしている。

A夫、ボールを持ってE子のそばに来て、一人で投げて遊びは

じめる。

E子、「あっち行きましよ」と実験者Aを隣の部屋にさそう。

A夫、ボールを持ってE子のいる部屋へ来る。

E子、再び「あっち行きましよ」と実験者Aを元の部屋に連れ

・5~8回 A夫を避ける態度はみられなくなり、A夫に対する強い関心もみられない。

・9~15回 A夫に対して強い関心を示し、A夫を非常に強く求め、A夫のことばや行動の真似が多くなる。また積極的にA夫にさそいかけたり、話しかけるようになり一緒に遊ぶことを非常に喜ぶ。

例 9~15回

毎回E子は入室するとすぐ、挨拶も済まないうちに「Aちゃん は」と実験者に尋ねる。

〔E子↓D子〕

・1~6回 活動の鈍いD子に関心を示し、遊びやおやつにさそう。

例 3回

E子、実験者Aと汽車ごっこをしている。

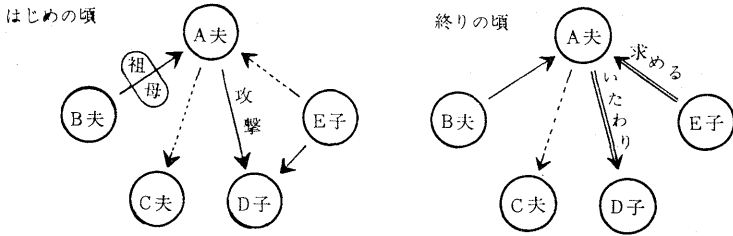
D子、壁際にじっと立っている。

E子、D子に「一緒にしましよ」と何度かささそう。

D子、返事もせず、動こうともしない。

E子、何度かささすから、D子の前に行き「キー」と大声で叫んでみる。

図2 対人関係の変化



→ は関心をもって示す。  
二重線は関心の強いことを表わす。

----→ は避けていることを示す。

・ 何においても消極的で、不活発な子に対し、活動的な子に関心を示し、その子を求める。

D子、何の反応もない。  
・ 7~15回 D子に対する関心はほとんどみられない。  
以上の対人関係を実験のはじめの頃と、終りの頃に分けてまとめると上の図のようになります。

本実験の結果は次のようにまとめることができます。  
・ 自分より能力もあり、活動的な子に関心を示し、その子を求める。  
・ 何においても消極的で、不活発な子に対し、活動的な子に関心を示し、その子を求める。

3 まとめ  
以上の実験の結果をまとめてみると次のようにいえると思います。  
二歳児でも、同年齢の子とも遊びたいという欲求は強く、参加の態度や他の子どもへの関心の示し方などにおいては個人差が大きいが、集団に参加することは楽しいようだ。しかし、子どもたちの間に友だち意識がみられ、他の子どもとの交渉がもたれるようになるには、ある期間(本実験では3回以上)が必要と思われる。回を追って徐々に集団遊びの占める割合はふえてはくるが、独り遊びがなくなることはない。  
友だちに対する関心の持ち方は、その子と相手の能力、活動(活動の種類、内容、量、積極性)、性格などによって非常に異なる。

(お茶の水女子大学)

## 欧米の幼児教育 ⑧

# カナダの幼児教育

西 本 脩

### 施設の種類

カナダで幼児教育を行なっている施設は、保育園 (day nursery) と保育学校 (nursery school) と幼稚園 (kindergarten) の三種類であり、どれも、おもに大都市の中心部に見いだされます。

保育園と保育学校は二歳から五歳までの幼児を、幼稚園は五歳から六歳までの幼児を対象として考えられています。二歳から六歳までの幼児を入れる私立の教育施設がいくつかあり、それらの施設は保育幼稚園 (nursery-kindergarten) と名付けられていることもあります。

### 組織・財政・管理

保育園はオンタリオ州とマニトバ州の二つの州に見られ、個人・教会と宗派・地方の地域社会・福祉事業団・公当局など、いろ

いろな援助のもとに運営されています。おもに個人営利事業として経営されている保育学校と保育幼稚園は、ほとんどすべての州に見られます。

一〇州のうち七州に見られる公立幼稚園は、おおかた州の教育局 (department of education) の認可を得て、都市の学務委員会 (school boards) が設置します。この場合、公立幼稚園は学校系統の欠くことができないたいせつな要素として取り扱われています。つまり、他の公立学校と同じ補助金の交付を受け、同じ規則の規制を受けています。そして、学務当局の正規の監督のもとにあります。学務当局には、ふつう初等教育の指導主事がいて、幼稚園と義務教育 (小学校) の三年生までを監督する責任を負っています。



## いろいろな特色

幼児教育は義務教育ではなく、随意です。たいていの場合、幼稚園にはいる前の一二月三一日までに幼児が満四歳になっていなければならぬと、規則にははっきり書いてあります。学年はじめは九月ですから、幼稚園にはいる最低年齢は、満四歳八か月です。オンタリオ州には、四歳児のための年少児幼稚園 (Junior Kindergarten) が少しあります。前にもしるしたように、保育園と保育学校の場合は、入園を許される最低年齢は二歳です。

公立幼稚園以外の幼児教育施設は、ふつうある種の料金を請求します。その金額は施設によって非常に異なりさまざまです。保育園はふつう、親の支払い能力をもとにして料金を徴収しますが、この施設は地方の福祉資金から補助金を交付されているので、その料金はさほど高くはありません。教会・宗派・あるいは福祉事業団が経営しているいくつかの幼児教育施設では、料金を徴収しません。設備がよく整ったある種の私立の施設では、高い料金を徴収するかもしれません。

一クラス当たりの幼児の人数を限る規定は何もありません。

## 教育活動と方法

オンタリオ州・サスカチュワン州・ブリティッシュコロンビア州の教育局は、幼稚園の教育計画を示す「幼稚園便覧」を出してお

り、ケベック州では、カトリック委員会の規則がカトリック幼稚園に対する指令を含めています。

これらの公式の教育計画はすべて、幼児の知的・道徳的・社会的・情緒的・身体的発達を助長することの必要性を強調していません。霊的発達 (spiritual development) も、宗教と教育が密接にタイアップしている学校系統での一つの目標として、加えられています。学科は正式には教えられていません。幼稚園教育の目的は、学校教育における進歩をたやすくするようないろいろな経験を、幼児に与えることです。したがって、お話を聞くこと・絵を見ること・経験を話すこと・自然環境を探ることは、すべて正式の読書教育計画にはいったときに子どもを助けます。

私立の幼児教育施設はそれぞれ、主として教員の訓練と経験によって決められる独特な教育計画に従います。保育園は幼児教育の分野の当局と密接な接触を保ち、その保育計画は、幼児教育における最良の思想と実践をもち込んでいます。幼児は保育園で一日中過ごすので、幼児の健康や栄養にも、その教育と同様に、多くの注意が払われます。

幼児教育の責任を負っているたいの公当局は、幼稚園の保育学校に必要な、屋内・屋外の教材の目録を発表しています。けれども、これに関連する規定は何もなく、教材の量と種類は施設

によってさまざまです。最大の一致は、公立学校の系統の幼稚園で得られます。そこでは、専門家の助言が受け入れられ、たいいての推薦教材を備えるのに十分な金があります。

### 教える言語

カナダの教育施設で教える言語は、英語かフランス語かのどちらかです。わたしの知っている限りでは、幼児教育施設で第二の言語を教えることができるかどうかは、今まで大規模な研究や公式の実験のテーマではありませんでした。

幼児の段階にテレビでフランス語を教える実験が、一九五九年—一九六〇年の学校年度に始められ、引き続き行なわれていきます。この課程は、特に教育施設のために企てられたものではありませんが、ある幼稚園や小学校低学年で利用されています。

### 時間割

保育学校は半日かまたは全日か、どちらかの保育計画を持っています。幼児は九時ごろに來ます。保育園は一日に七時間か八時間、開いています。

### 研究の中心施設

幼児教育に関する研究は、四つのおもな中心施設で（オンタリオ州に二か所、ケベック州に二か所）、引き受けています。トロント大学の心理学部にある児童研究所は、大がかりな研究計画を

行ない、その研究結果は、研究所のモノグラフや紀要やそのほかの出版物に発表されています。なおその上に、研究所の所員はしばしば、幼児教育施設が設立されつつあるときに、助言を求められます。

オンタリオ州のもう一つの中心施設は、トロント教育大学です。ここでは、研究よりも教員の養成に重点が置かれておりません。

ケベック州には、ラバル大学の教育学部の幼児教育学科と、モントリオール大学の教育研究所があります。

### 経済生活・労働生活との関係

幼児教育施設の大都市中心部への集中化は、この施設がある程度社会的要求に応じて設立されていることを示しています。もともと託児所 (crèche) であった保育園は、長い社会福祉の歴史を持っています。それは、おもに貧困家庭や欠損家庭の要求を満たしました。一九三九年から一九四五年までの第二次世界大戦中は、軍隊にはいった男の人に代わるためか、または未亡人になつたためか、やむをえず働かなければならなくなった母親の子どものために、多くの保育園を開くことが必要でした。多くの保育園は、戦後閉じられましたが、いくつかは開かれたままでした。この施設は、育児教育の専門家はもちろん、医学および栄養の専門



家の奉仕も得て、一般に、健康・栄養・教育の高い水準を保ちました。保育園は都市の非常に人口が集中したところと、わりあい普通の社会人としての権利を与えられない経済的・社会的地位が低い住民の地域にだけ見いだされます。

私立の保育学校と幼稚園については、やはり大都市の中心部に集中されていますが、社会福祉的な目的よりもむしろ教育的・心理的な目的を持っています。

私立の保育学校や幼稚園に通う幼児は、平均あるいは平均以上の社会的・経済的地位の家庭から来ており、子どもが一日のうち何時間か、素質や傾向を発達させるような活動を幼児に与えられるような人に教育してもらうよう願っています。したがって、これらの施設の立場からいうと、栄養上の注意や医学的管理のおもな責任をとるのは家庭です。公立幼稚園は、あらゆる社会階級の子どもたちを対象として考えられています。似かよった目的を持っています。

#### 家庭との協力

家庭と幼児教育施設との間の協力は、ありふれた事がらです。先にあらまし述べたような要素のために、ときには保育園では幼稚園や保育学校よりも、この目的を達することがいっそうむずかしいようです。両親との接触はいろいろな方法で保たれていま

すが、その中で一般的なのは、まず第一に両親との定期的な面接触であり、それから両親との臨時の面接触です。これらより少ない接触の種類は、施設での親の観察・討論グループ・親のための講話などです。親に対する筆記による通信は、多くの公立幼稚園の特色になっています。

#### 安全と輸送

幼児の輸送は、幼児教育施設にとってそれほどたびたび起こる問題ではありません。多くの幼児教育施設は、幼児をすぐ近所から寄せ集めます。いくつかの私立の教育施設では、ふつう追加料金を取って、幼児を輸送する手はずを整えています(タクシーと契約をするとか、施設の職員が自分の車を使うとか)。交通規則はすべての園児を保護し、園児はしばしば街路をよこぎることができるように、特別なバトロールの奉仕を受けます。

#### 建物と設備

公立の幼稚園は、幼児の健康と保護に意を用いて設計された教室におさめられています。へやには、火事の場合に利用する出口(外側に開くドアがついている)と、十分な空間・明るさ・暖房がなければなりません。適当な大きさの便所と洗面器が手近に備えられています。

私立の幼稚園や保育学校の建物は、住宅の余分のへやから、特

別に設計された園(校)舎まで、いろいろなものがあります。したがって、幼児の保護・健康・安全のための施設は、事情によつてまちまちです。ある州では、この点について厚生局が定めた規則があります。

### 教員の養成

公立幼稚園の教師をするためには、ふつう、初等教育専門官の免許状かまたはこれと同等のものがが必要です。幼稚園と小学校の一・二・三年生を教えることができるこの免許状を取得するのは、一般に基礎教育免許状の課程がすんだあと、まる一年間の勉強をすることが必要です。この一年の勉強は、夏期講習会あるいはおりおり、夜学校の学課で行なわれるかもしれません。私立の教育施設についていうと、教職員の資格は非常にさまざまで、一般的にいうことはできません。

### 幼児教育の発展上の困難点

公立幼稚園の発展を妨げている最も大きな障害は、第二次世界大戦後の人口の急激な増加です。義務教育学齡児の場合でさえ、校舎と教員が足りず、しきりに求められています。実際、幼稚園クラスのために使うはずの小学校のスペースが、正規の小学生の教室として用いるために先に取られています。したがって、いくつかの学校系統では、幼稚園が前よりは少ししかありません。私

立の教育施設は、多くの費用がかかる財政上の冒険であり、親が快くこのような教育のために支払う金額は限られているので、急にはふえません。

けれども、幼児教育の発展を妨げている本当のおもな障害は、人々がまだ幼児教育を絶対必要なものであると考えないことにあります。たとえば、もし子どもの教育は五歳までに始めることが必要であると考えらるなら、いくつかの幼児教育施設が作られるでしょう。

(大阪緑蔭女子大学)

## 幼児の教育 第六十六巻 第七号

七月号 © 定価八〇円

昭和四十二年六月二十五日印刷  
昭和四十二年七月一日発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内  
編集兼 津 守 真  
発行者

東京都文京区大塚二ノ一ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内  
発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一  
印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一  
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番  
◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所フレイベル館にお願いいたします

# 幼児の教育 原理と研究

津守 真 木原溥子 編

本書は「幼児の教育」誌に掲載された論文をまとめたもの。幼児の教育の原理から研究方法、記録、さらに制度上の問題までを、系統立てて編集したものである。最近の幼児教育の傾向を知る上にまた概論書としても適切である。

内容—第一章「幼児教育の課題」では幼児教育全般にかかわる問題を扱う。第二章「幼児教育の原理と方法」では教育課程、指導計画、子どもを観察する技術など幼児教育の実際にあたってよりどころとなる論文を集めた。第三章「保育の中での研究活動」では、保育研究の基本論、さらに実践記録の具体例をのせてある。第四章「幼児教育制度をめぐって」は義務制の問題など制度上の問題を衝く論叢。  
執筆者—牛島義友・及川ふみ・恩田 彰・斎藤文雄  
坂元彦太郎・清水エミ子・莊司雅子・昇地三郎・鈴木正子・多田鉄雄・津守 真・樋口三紀子・日名子太郎・堀合文子・松村康平・水原泰介・山下俊郎・渡辺桂子他

A 5判 四三二ページ 六五〇円

—好評発売中—

## 幼児教育課程新論

坂元彦太郎著

B 6判 四〇〇円

## 新幼稚園お話集 上・下

日本幼稚園協会編

A 5判 各四五〇円

## 幼稚園—人間関係の生活の場—

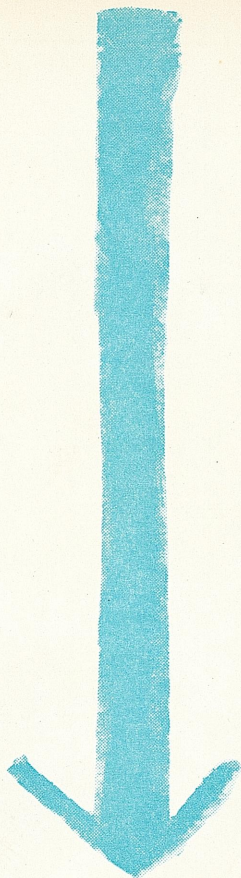
K・H・リード著

宮本美沙子訳

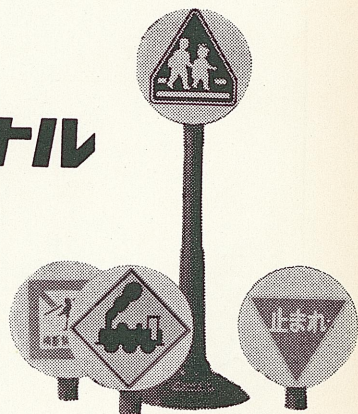
A 5判 六〇〇円

発行 フレーベル館

16種類以上の遊びができます……



## キンダー シグナル アイ



●辨慶の7つ道具など、むかしむかしのこと、現代っ子の遊び道具は機能的な上にプラス美しさとスマートさ。●旗立て・標識・輪投げなど16種類以上の遊び道具に早変わりします。

これを使いこなせるのは現代っ子だけ！辨慶

さんもキットくやしがるでしょう。●1セット 紅白スタンド各1本・紅白ネット各1個・標識板（交通標識8種4枚・白板2枚）

定価5,000円

発売・株式会社

フレーベル館